

クロスロード

4



2020 APRIL

特集1

保健・医療分野の活動ポイント

特集2

“信頼獲得”の道



現在の派遣国数

76 カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2020年2月末現在、単位：人)

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	46	2
エスワティニ	2	
エチオピア	22	
ガーナ	62	2
ガボン	22	3
カメルーン	28	2
ケニア	44	3
ザンビア	59	9
ジブチ	14	
ジンバブエ	8	
セネガル	39	1
タンザニア	67	3
ナミビア	16	
ベナン	45	
ボツワナ	41	
マダガスカル	34	
マラウイ	34	
南アフリカ共和国	6	4
モザンビーク	35	1
ルワンダ	44	
レソト	1	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	28	
インドネシア	22	1
ウズベキスタン	23	5
カンボジア	29	2
キルギス	32	1
タイ	25	4
タジキスタン		2
中華人民共和国	11	
ネパール	47	5
東ティモール	37	
フィリピン	33	2
ブータン	15	4
ベトナム	34	12
マレーシア	18	6
ミャンマー	16	3
モルディブ	11	
モンゴル	43	
ラオス	40	

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	4	
サモア	16	1
ソロモン	25	2
トンガ	17	1
バヌアツ	29	4
パプアニューギニア	30	4
パラオ	11	7
フィジー	24	3
マーシャル	8	3
ミクロネシア	16	6

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	6	2

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	21	2
チュニジア	6	
モロッコ	20	3
ヨルダン	39	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		14	11	5
ウルグアイ		3		
エクアドル	40	3		
エルサルバドル	16			
キューバ		1		
グアテマラ	35	1		
コスタリカ	43	7		
コロンビア	21	10		
ジャマイカ	22	6		
セントビンセント	3			
セントルシア	21			
チリ		1		
ドミニカ共和国	27	1	4	2
ニカラグア	2			
パナマ	17	2		
パラグアイ	42	2	7	3
ブラジル				84 13
ベリーズ	15			
ペルー	48	7		
ボリビア	53		1	1
ホンジュラス	23			
メキシコ	2	6		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,835 (809/1,026)	180 (137/43)	107 (49/58)	24 (9/15)	2,146 (1,004/1,142)
累計 (男性/女性)	45,775 (24,301/21,474)	6,553 (5,298/1,255)	1,542 (597/945)	547 (252/295)	54,417 (30,448/23,969)

一般＝青年海外協力隊/海外協力隊

シニア＝シニア海外協力隊

日系一般＝日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2020 APR
Contents

■職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	16、22
映像	24
野菜栽培	26
農林統計	25
青少年活動	20
バレーボール	35
日本語教育	4
小学校教育	4
幼児教育	14
手工芸	18
助産師	6、28
栄養士	8
感染症・エイズ対策	10

■国別索引	掲載ページ
ウガンダ	25
コロンビア	35
ザンビア	10、22
ドミニカ共和国	16
パラグアイ	4
東ティモール	18
フィリピン	26
ブラジル	4
ペルー	20
ボリビア	24
ホンジュラス	6
マラウイ	8
モンゴル	14

■出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	24
宮城県	16
福島県	18
茨城県	25
千葉県	6
東京都	26
神奈川県	10
岐阜県	14
愛知県	35
徳島県	8
福岡県	20、22

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん（ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊）

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が現地での活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株)AND

レイアウト：(株)AND

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' NEWS

- ▶教育関係者向けの研修会において「ユニバーサルデザイン」についての講演を実施（パラグアイ）
- ▶日系人の思いを日本に届けたい 日系社会の方々と共にダンス動画を作成（ブラジル）

特集1

保健・医療分野の活動ポイント

6

CASE 1

小池瑞希さん（ホンジュラス・助産師・2017年度2次隊）

8

CASE 2

安富 藍さん（マラウイ・栄養士・2017年度2次隊）

10

CASE 3

野瀬友望さん（ザンビア・感染症・エイズ対策・2017年度2次隊）

12

活動Q&A集

特集2

“信頼獲得”の道

14

CASE 1

春日井里菜さん（モンゴル・幼児教育・2017年度2次隊）

16

CASE 2

後藤真美さん（ドミニカ共和国・コミュニティ開発・2017年度2次隊）

18

CASE 3

平出将孝さん（東ティモール・手工芸・2017年度2次隊）

20

CASE 4

岩瀬さくらさん（ペルー・青少年活動・2017年度2次隊）

22

“失敗”から学ぶ

西 泰佑さん（ザンビア・コミュニティ開発・2017年度2次隊）

24

希少職種図鑑

- ▶映像 安達弓華さん（ボリビア・2017年度1次隊）
- ▶農林統計 藤 大輝さん（ウガンダ・2017年度1次隊）

26

JICA Volunteer's Before ▶ After ~人生を変えた2年間~

測量・建設コンサルタント企業の社員 堀切若奈さん（フィリピン・野菜栽培・2015年度4次隊）

28

帰国後よもやま話

助産師隊員篇

30

JICA海外協力隊的プチテクガイド

スマートフォンで動画づくり/身近な材料で行う染色/おしゃべりにリユース

32

INFORMATION

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「ご褒美」

35

JOCV SPORTS NEWS

36

隊員めし

にがり不要！ピーナッツからつくるお豆腐



ワークショップでDUAの4視点をもとに授業づくりについて話し合う参加者たち

開催までの流れ	
(2019年12月9日) 企画①	研修会のイメージ共有、役割分担、今後の会議の日程調整。
(12月21日) 企画②	DUAについて共通理解、ワークショップ(WS)の内容を構想。
(2020年1月29日) 企画③	講義班とWS班に分かれて内容を精選、具体的に内容を詰める。
(1月30、31日) リハ・改善	全員でリハーサル・内容改善(2回)、シナリオ確認。道具の準備、事務所所長とリハ・改善。
(2月2日) 最終打ち合わせ	ひとりひとりの動きと、持っていく道具を細かく確認。
(2月3日) 1回目開催	本番。終了後に反省会。翌日改善。
(2月5日) 2回目開催	本番。終了後に反省会。

Paraguay

教育関係者向けの研修会において「ユニバーサルデザイン」についての講演を実施

文 = 藤城陽子さん(パラグアイ・小学校教育・2018年度1次隊)

※実施した教育分野隊員(敬称略):小田翼(体育・2018年度1次隊)、山口敦司(小学校教育・2018年度1次隊)、梅田紗希(小学校教育・2018年度1次隊)、藤城陽子(小学校教育・2018年度1次隊)、吉岡昂正(小学校教育・2018年度3次隊)、古澤優花(小学校教育・2018年度3次隊)、山口美智代(小学校教育・2018年度3次隊)、伊波真理子(小学校教育・2019年度1次隊)、沖和未(障害児・者支援・2019年度1次隊)、山崎奈々恵(小学校教育・2019年度1次隊)

教育・科学省インクルーシブ教育総局主催の研修会において、10人の教育分野隊員で「ユニバーサルデザインの視点をいかした授業づくり」学習上・生活上の困難にかかわらず全ての児童がよりよく参加・理解できる授業」(以下、DUA: Diseño Universal para el Aprendizaje)について、講義とワークショップを行った。授業対象者は、1回目が技術支援官約30人、2回目が教育支援事務所長約40人だった。

私は配属先の小学校でDUAの視点を生かして環境に関する授業づくりを行い、その良さを知ってもらえるよう活動していた。また、算数教育で派遣されている隊員と現地の先生たちが作成し、使用実践を積み上げてきた算数教材「MaParal」(Matemática para Paraguay)が、昨年正式に教育・科学省に国定教材として認められた。パラグアイの教育隊員がかかわるインクルーシブ教育推進という需要と、

「MaParal」の指導方法教授の需要という2つの事柄が重なったことで、この研修会が実施されるに至ったのだ。

研修会で行った内容は、①DUAの視点を生かした授業づくりについての講義、②DUAの4視点(シンプル、クリア、ビジュアル、シェア)を授業に生かすワークショップ、の2つである。日本式の授業ができるようになるのではなく、パラグアイの授業スタイルの中によりよい理解を促す手立てを入れられるようになることを留意点とした。また、子どもたち全員が学べる環境づくりの大切さやその方法を理解し、実践意欲を高めて日々の教育活動に生かそうとすることを目標に、10人で内容を練り上げた。講義では、基本的な理論と共に、実際にパラグアイで効果があった方法とその効果を見せ、ワークショップでは、さまざまな難しさをもった子どもたちが教室に何をイメージしながら、4視点をもとに手立てを話し合ってもらった。研修会後は、現場の先生たちにも研修会をしてほしいという声上がるなど、研修に満足してもらえたようだった。

10人で試行錯誤してつくり上げた研修会。その過程ではチームを組む良さを感じた。チームで働いたからこそさまざまな観点で考えられ、きめ細やかに準備ができ、何よりインパクトと価値が生まれた。今後も段階的・継続的に研修会をしていくことで教員の指導力が向上し、全ての児童が達成感を味わえる授業づくりが行われていくことを期待している。

研修の後の集合写真。技術支援官と隊員たち



*1 技術支援官…日本でいう教育委員会の指導員のような役割。
*2 教育支援事務所長…日本でいう教育委員会の指導主事のような役割。

動画アップまでの流れ	
(5カ月前) 企画・募集	発案、同期隊員に参加募集。
(4カ月前) 参加者決定	参加隊員は配属先に協力を依頼。企画計画書を作成。
(3カ月前) 著作権確認	音楽の使用許可を確認。
(2~3カ月前) 練習・撮影	各配属先でダンスの練習・撮影。
(1カ月前) 動画制作	各動画を集め、動画制作を開始。
(当日) 公開	動画共有サイトYouTubeにて動画を公開。
(公開後) 広報	メディアや地方自治体への広報。SNSで拡散。



ダンスで決めポーズをする参加者のみなさん。合計約420人の方々にご参加いただいた

Brazil

日系人の思いを日本に届けたい 日系社会の方々と共にダンス動画を作成

文 = 近藤ゆみさん(日系社会青年海外協力隊/ブラジル・日本語教育・2018年度1次隊)

※1 参加者(敬称略、全て2018年度1次隊):日系社会青年海外協力隊=近藤ゆみ(日本語教育)、井上華子(日本語教育)、津田晴香(日本語教育)、伊藤栄里子(日本語教育)、山口恵子(日本語教育)、足立幸太郎(小学校教育)、杉本容子(小学校教育)、中村健太郎(日本語教育)、高橋優菜(ソフトボール)、生田目沙希(バドミントン)、石神真有子(文化) 日系社会シニア海外協力隊=平谷聡子(日本語教育)、岡田みどり(高齢者介護)、村田菊代(高齢者介護)、堀江晴美(青少年活動)

私たちは、約110年前に日本からブラジルに移住した日本人たちがつくり上げた、世界最大の日系社会で活動しています。日本の地球の反対側に位置するブラジル。そんなブラジルには、今年日本で行われる東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を心待ちにしている日系人がたくさんいらっしゃいます。日系人のみなさんはブラジルに住んでいても、自分たちが日本人のルーツを持っていることや、日本のことを心から誇りに思っておられます。「日本は憧れ」「日本はやっぱりすごい」「こんな言葉がいつも飛び交っています。私たちは、そんな日系人の方々の日本への強い思いを日々感じています。

この案には15人の同期隊員の有志たちが賛同・協力してくれ、実現することができました。配属先に趣旨を理解してもらい、公開許可の確認を取り、ダンスの練習を重ね、何度も撮り直しました。そんな中で、隊員たちは思春期の子どもたちにも楽しめる工夫をしたり、学校にお願いして授業の時間を練習に当てたり、高齢の方には時間をかけて何度も練習したり。多くの苦労を経て、ブラジル日系社会の思いを力々にしたのが、私たちの「パブリカ」ダンス。この案には15人の同期隊員の有志たちが賛同・協力してくれ、実現することができました。配属先に趣旨を理解してもらい、公開許可の確認を取り、ダンスの練習を重ね、何度も撮り直しました。そんな中で、隊員たちは思春期の子どもたちにも楽しめる工夫をしたり、学校にお願いして授業の時間を練習に当てたり、高齢の方には時間をかけて何度も練習したり。多くの苦労を経て、ブラジル日系社会の思いを力々にしたのが、私たちの「パブリカ」ダンス。

その一方で、私たち日本人はそんな日系人の存在や日系社会についてあまりよく知らないのです。それが故に、日系人が日本へ行ったときに外国人として扱われてしまうなど、辛い思いをしたという話を聞きました。

多くの方に動画が届き、「涙が出た」「温かい気持ちになった」などの視聴者からのコメントや、「日系社会の協力隊がこんなにブラジル各地で活動しているとは知らなかった」「自分たち以外の日系団体の存在を知れた」「紅白を見ながら踊ったよ」など、参加者や配属先、参加者の家族からも嬉しい反応がありました。



子どもから大人まで楽しく踊る練習風景。「踊る人もダンスを見ている人もみんな笑顔、最高の空間となりました」と近藤さんは話す

動画公開後、SNSやメディアを通して多くの方に動画が届き、「涙が出た」「温かい気持ちになった」などの視聴者からのコメントや、「日系社会の協力隊がこんなにブラジル各地で活動しているとは知らなかった」「自分たち以外の日系団体の存在を知れた」「紅白を見ながら踊ったよ」など、参加者や配属先、参加者の家族からも嬉しい反応がありました。これからこの動画がひとつのきっかけとなり、日本と日系社会のつながりがさらに強まることを願っています。

*2 ①メイン動画: オープニング+ダンス (03:47) ▶ <https://www.youtube.com/watch?v=ZkAbvtMKKVI>
②メイキング付動画: オープニング+ダンス+メイキング (05:53) ▶ https://www.youtube.com/watch?v=W_oXwdFDLVg

*パブリカ…米津玄師氏が作詞・作曲・プロデュースした楽曲。

Pick-up SHOT 》我が子に「MIZUKI」と命名



『妊婦の家』に長く滞在し、保健指導だけでなく、日々の会話や散歩などで仲良くなった母親（写真右）が、生まれた子どもに『MIZUKI』という私の名前を付けてくれました。一緒に楽しい時間を過ごすことができ、『瑞希』という言葉の意味（美しい希望）も気に入ったからとのことでした。ホンジュラスでは、改名するのに高額な費用がかかるため、『慎重に考えて』と何度も話したのですが、そのうえで決断してくださったので、うれしい出来事でした」（小池さん）

同僚看護師から活動への理解が得られるようになったことで、任期の後半、活動にもうひとつの柱を加えることができた。配属先外での啓発活動だ。任期の前半、『地域』の状況を知りたい」との意図から、市の保健所の「健

「外部の風」を取り込む役割

勉強会で扱うテーマは同僚看護師たちとの話し合いで決定。「新生児の観察」や「新生児蘇生法」、「産科大出血への対応」など、毎回異なるテーマの勉強会を5回にわたって実現することができた。勉強会では「ロールプレイング形式」を採用。参加者たちに「医師」「看護師」「患者」などの役割を割り振り、実際の分娩シーンを演じてもらいながら、技術の解説や再確認をしていくという方法である。それまでにホンジュラスで見たイベントなどで、現地の人たちが「演劇」を好むと感じていたことから着想したものだったが、実際、同僚たちには好評だった。

化が見られるようになったのは、着任して7、8カ月経ったころだ。配属先で地道に「手伝い」を続ける一方、プライベートでの付き合いも積極的に行うようにしたところ、彼女たちが小池さんの活動に興味を示すようになってきたのだ。そうして、なかには「妊婦の家」での保健指導に参加してくれる人も現れるようになった。

まず、小池さんの配属先では経験が浅い看護師たちの技術の底上げをするシステムがなかったことから、同僚看護師たちの技術レベルにはばらつきがあった。例えば、新生児の異常を早期に発見するためには「呼吸」や「心拍」などのバイタルサインを確認する「観察」が重要だが、同僚看護師のなかには「身長」や「体重」の観察を優先してしまう人もいた。そうしたなか、小池さんは着任してまもない時期から彼女たちに勉強会の実施を提案していたが、同僚看護師たちとの人間関係ができたことで、ようやくそれを受け入れてもらえるようになったのだ。

「手伝い」で語学力を鍛え、その後、保健指導や技術指導へと活動を拡大

助産師隊員として分娩施設に配属された小池さん。当初、スペイン語力の不足で同僚たちとの協働が思うようにいかなかったなか、「今、できることをやる」という姿勢で活動をスタートさせた。

小池さんの配属先は、レンピーラ県レバエラ市が運営する市内唯一の分娩施設。扱うのは正常分娩のみで、母体や胎児に異常がある場合は、救急車で隣市の総合病院に搬送することとなっていた。一方、妊婦健診が行われるのは市の保健所。配属先は分娩や子どもから高齢者までを対象にした救急外来に特化した施設だった。同市は人口が約4万人という規模で、配属先へのアクセスが悪い地域の住民も多い。そうした妊婦の自宅出産を減らすため、正産期の妊婦が無料で宿泊できる出産待機施設「妊婦の家」が配属先には併設されており、常時数人が宿泊していた。助産業務を担当していたのは、多い時期で7人配置されていた看護師たち。配属先の分娩件数は月に40件程度だったが、救急外来への対応、さらには誤って受診しに来る一般外来患者への対応もしなければならなかったため、同僚看護師たちは多忙を極めていた。そうしたなかで手薄になっていたのが、配属先を利用する妊産婦への保健指導。その活性化を支援することが、小池さんに求められていた役割だった。

「今、できること」からスタート

着任当初、活動の壁となったのは「語学力」だ。同僚看護師とともに「妊婦の家」の宿泊者への保健指導を始めた。いと考えたものの、ただでさえ多忙な彼女たちは、たどたどしいスペイン語で話しかける小池さんを煩わしく感じている様子を見せるのだった。そこで小池さんは、「まずは今、できることから始めよう」と決意。ホンジュラスの助産師隊員は身体への侵襲行為が認められていなかったことから、診察の準備・介助や物品の整理整頓など、助産師の専門性がない者でもできる作業も厭わず注力。そうするなかで言葉を覚え、少しずつ同僚たちとのコミュニケーションを増やしていった。

「妊婦の家」の宿泊者への保健指導は、

特集 1

保健・医療分野の活動ポイント

保健・医療分野の活動では、「同僚の専門知識の不足」や「配属先の人員不足」といった共通の課題が存在する。そうしたなか、協力隊員の立場で果たし得る役割は何か？ 3つの異なる職種の活動事例をとおして、ポイントを整理する。

case 1 助産師



- 1 配属先で行った助産技術の勉強会で患者役を演じる小池さん（左）
- 2 「妊婦の家」で赤ちゃんの人形で授乳指導をする小池さん（右）
- 3 産褥婦に同僚看護師（中央）と家族計画の指導をする小池さん（右）
- 4 「妊婦の家」で同僚看護師とヨガの指導をする小池さん（右端）
- 5 小学校で「妊婦ジャケット」を用いて性教育を行う小池さん（右端）

- *1 正産期…赤ちゃんがいつ生まれても問題ないとされる、分娩予定日の3週間前から2週間後までの期間。
- *2 妊産婦…妊婦、産婦（出産前後の女性）、褥婦（分娩後、母体が妊娠前の状態に戻るまでの女性）の総称。

同僚看護師たちの腰が重かったため、当初は単独で行うことにした。内容は、「産前・産後の栄養バランス」「授乳」「ヨガ」「家族計画」など。工夫したのは、1回のプログラムを15分程度に抑えることだ。妊娠中は集中力が低下しがちなうえ、任地の人たちは短時間なら集中する傾向があると感じたための配慮である。短時間でも有益な保健指導となるよう、絵を用いた教材で理解を促したほか、「根拠」の詳しい説明は避け、「赤ちゃんが泣いたら授乳を求めているサインだ」といった「要点」を繰り返して伝えるようにした。やがて、「宿泊中の楽しみがない」という理由で「妊婦の家」の利用を避ける人がいると知ったことから、一緒に料理をするなど、彼女たちの気持ちを和らげるための時間もつくるようになった。

同僚たちの態度が変化

同僚看護師たちの態度によりやく変

こいけみずき 小池瑞希さん (ホンジュラス・助産師・2017年度2次隊) の事例

PROFILE

1991年生まれ、千葉県出身。看護師と助産師の資格を取得した後、助産師として病院のGCU（新生児治療回復室）に約3年間勤務。2017年10月に青年海外協力隊員としてホンジュラスに赴任。19年10月に帰国。

活動概要

- レンピーラ県レバエラ市が運営する分娩施設、レバエラ市母子保健センターに配属され、主に以下の活動に従事。
- 妊産婦への保健指導
- 看護師を対象とする助産技術の研修会の実施
- 整理整頓など施設の業務改善支援
- 小・中学校での保健授業の実施

健康推進員」が市内の小・中学校に出向いて行う保健授業に参加し、性教育の講習を一緒に担当させてもらったことがあった。配属先で出産する妊婦には若年妊娠のケースが多く見られたことから、この活動は引き続き取り組んでいきたいと考えたが、当初、同僚看護師たちは小池さんが配属先以外で活動することに難色を示した。しかし、任期の半ばになると、「予防が大事」という小池さんの主張を彼女たちも理解。小・中学校での保健授業への継続的な参加を認めてくれるようになった。

小池さんは小・中学校に赴いた際、配属先で出産した女性が学校の近くに住んでいれば、その後の状況を確認。その結果について、「元氣そうだった」「すごく良いお産ができた」と言っていた」などと同僚看護師たちに報告すると、彼女たちの仕事へのモチベーションもアップした。配属先の中ばかりで働く彼女たちには、それまで「配属先で出産した女性たちのその後」について知る術がなかったのだ。

配属先を「外」とつなぐ役割は、別の場面でも果たすことができた。ホンジュラスで活動していたほかの助産師隊員の誘いを受け、小池さんは他市の4カ所の分娩施設を見学。「分娩室の各物品が取り出しやすいように配置されている」など、配属先にはない「秩序」が見られたことから、見学先のようにした様子を写真に収め、同僚たちに紹介。他の分娩施設を見たことがない人が大半だったなか、小池さんがもたらした情報に彼女たちは刺激を受け、整理整頓など施設内の環境改善に積極的に取り組むようになったのだ。

安富さんが配属されたのは、病床数約250床の総合病院。カウンタートに於ける栄養士が配置されていたのは、「地域保健」の担当部署であり、その主な業務は、栄養補助食品を配布するなどして低栄養児をフォローする国の低栄養対策プログラムの統括だった。その業務に忙殺され、手薄になっていたのが、患者や地域住民に向けた栄養指導。それを活性化させることが、安富さんに求められていた役割だった。

食事調査を踏まえた栄養指導

栄養指導を始めるのに先立って安富さんが取り組んだのは「食事調査」だ。対象としたのは、栄養指導のニーズがありそうだと判断した「糖尿病・高血圧科」「HIV/AIDS科」「産婦人科」「乳幼児科」の4つの専門外来の患者たち。それぞれ約30人ずつをサンプルに、身長や体重、血糖値、血圧などを測定し、BMIを計算したうえで、「聞き取



やすどみ あい
安富 藍さん

(マラウイ・栄養士・2017年度2次隊)の事例

PROFILE

1989年生まれ、徳島県出身。管理栄養士として病院・特別養護老人ホームに計6年間勤務した後、2017年10月に青年海外協力隊員としてマラウイに赴任。19年10月に帰国。

活動概要

- カスング県病院(カスング県カスング)に配属され、主に以下の活動に従事。
- 患者を対象とする食事調査の実施
- 配属先内や地域での栄養指導の実施
- モデル献立の提案
- 配属先内での5S活動

クを行ってくれるのだった。栄養指導を始めてしばらくすると、ひとつの課題が見えてきた。講習の内容を同僚たちに伝えたところ、「患者はそのくらいのことでは知っているの、無意味だ」と言われることが出てきたのだ。そこで安富さんがとった対策は、マラウイの小学校や中等学校で活動する協力隊員に依頼して現地の理科の教科書を取り寄せ、「栄養」に関連する知識がどの程度盛り込まれているかを調べて知識レベルを把握することだった。すると、ビタミンやミネラルの摂取源・機能・欠乏症など、日本の学校教育で教えられているのと大差のないレベルの知識は、マラウイの中等学校までも教えられていることがわかった。安富さんは以後、その情報を踏まえて、配属先での栄養指導のレベルを調節するようになった。

2回目の食事調査で方針転換

安富さんは任期の半ば、それまでの栄養指導の効果を測る目的で、2回目の食事調査を行った。対象は、1回目と同じ4つの専門外来。調査の内容は1回目とはほぼ同じにしたが、方法は「記入式」に変更した。1回目の調査で、聞き取り調査では時間がかかり過ぎるという反省があったからだ。

この2回目の食事調査により、栄養指導を継続してきた糖尿病・高血圧科とHIV/AIDS科では、摂取する食品のバランスが1回目の調査のときと比べて改善されていることが判明。そこで以後は、専門外来の「産婦人科」と「乳幼児科」での栄養指導にも力を入れていくことにした。

特集1 保健・医療分野の活動ポイント

- 1 配属先によるアウトリーチに同行し、住民への栄養指導を行う安富さん
- 2 入院病棟で患者やその家族を対象に実施した栄養指導で講義を行う病院給食の調理スタッフ
- 3 先輩隊員のを参考に安富さんが作成し、好評だった「6 food groups」(マラウイ版の「6つの食品群」)の解説教材
- 4 安富さんが作成したモデル献立のレシピ書。「グラム」ではなく「大さじ何杯」や「食材の個数」で分量を表現したり、写真を多用したりすることで、わかりやすさを狙った

Lunch Meat stew with nsima

Ingredients

- Beef: 100g
- Tomato: 1
- Onion: 1
- Irish potatoes: 1/2
- Carrots: 1/3
- Vegetable oil: 1tablespoon
- Salt: 1/3teaspoon
- Maize flower: 1/3 cup
- Green vegetables: 1paquet
- Salt: 1/3teaspoon

You can also change Beef...
100g Chicken,
1 Dry fish, 2Egg, ½ cup beans

case 2 栄養士



り」よって主に以下の情報を確認した。直近の1週間、どのような種類の食品(肉、魚、卵、野菜、豆など)を、どのくらいの頻度で食べたか。前日、どのような食品をどのような調理法で食べたか。前日におやつを食べたか。前日の夜は何時に寝て、当日は何時に起きたか。前日にどのような仕事を何時間くらい行ったか。

この食事調査によって確認できたのは、主に次の事実である。

- 調査対象とした科では全般に、低栄養の人は少ないが、たんぱく質の摂取量が少ない。
- 糖尿病・高血圧科では、BMIが高値で太り気味の傾向がある。
- 糖尿病・高血圧科とHIV/AIDS科では、摂っている食品のバランスが比較的悪い。

以上の結果を踏まえて最初の栄養指導の場としたのは、専門外来の糖尿病・

2回目の食事調査の結果については、配属先の幹部によって毎朝開かれている申し送りのミーティングの場で発表。すると、「患者の変化」を伴う栄養指導をしていくことがあらためて配属先に認知されることとなり、「栄養のエキスパート」としてにわかには安富さんの活動に対する同僚たちの姿勢が協力的なものになった。そうして任期後半に入ってから新たに取り組めるようになったことのひとつが、「地域」に赴いて住民に栄養指導を行う活動だ。毎日村々に赴き、乳幼児健診などを行う部署が配属先にはあったが、それに週に1回同行し、訪問先でその地域の住民に栄養指導の講習を行わせてもらえるようになったのだ。

完成したのは、任期の残りが半年ほどとなったところ。それを、配属先で給食をつくる調理師に提示したところ、やはり国で規定している食材の種類と分量を変えることは難しいとの回答だった。そこで安富さんは、この取り組みの着地点を転換。配属先を訪れる人たちに、作成した献立案をそれぞれの家庭や病棟で食事をつくる際の参考にしてもらおうと着想した。そうして、作成した献立案をポスター形式にまとめ、配属先の各病棟に掲示。そのうえで、ときおり病棟を訪ねては、入院患者たちにそのポスターを示しながら栄養指導を行っていった。

Pick-up SHOT

そこらに生えている「草」も大切な食材

「マラウイの主食は、トウモロコシの粉からつくる『シマ』がメインで、庶民のおかずは豆や小魚の煮干しなどをトマトと一緒に煮込んだもの。そこらに生えている雑草も、おかしに加える大切な食材であり、市場で売られていることもあり。この写真は、庭に生じていた現地では馴染みの雑草の調理法を、親しい近所の女性に教えていただいたときのもので。現地の人から学んだ調理法は、モデル献立を作成する際に役立ちました」(安富さん)

高血圧科。主に朝の開院時に、待合室で診察を待つ患者を対象に、1回15分程度の講習を行った。受講者は平均で50人程度。主な内容は、食品の種類、糖質、糖質と高血圧の解説、糖尿病と高血圧はどのような食品を多く摂るのが良く、どのような食品の摂り過ぎが良くないか、血圧や血糖値はどの範囲が危険かなど。その後、専門外来のHIV/AIDS科でも陽性者に必要な栄養について指導するようになった。

英語がわからない患者も少なくなかったことから、講習は現地語のチェワ語で行うようにした。安富さんは現地語学訓練で2週間程度学んだだけであり、不安は大きかったが、同僚が手を貸してくれた。そのひとりが、糖尿病・高血圧科で事務を担当していた男性だ。手が空いているときに講師役を引き受けてくれるようになった。彼は配属先でもっともスピーチが達者な人であり、安富さんが作成したレジュメを渡すと、受講者を引きつける絶妙なトー

Pick-up SHOT ▶▶▶ 「ナース服」はPRツール



「現地で活動するときは、必ず現地のナース服（写真）か日本のナース服を着るようにしていました。『医療の専門性があるんだ』『ヘルスセンターの人だ』などと認識してもらえると考えたからです。それにより、YFCに参加する青少年や、村々でマラリアの検査や保健教育などを担う『コミュニティ・ヘルス・ワーカー』などに、私が行う活動への関心を持ってもらえたという実感があります」（野瀬さん）

「性」に関するものをメインとした。野瀬さんやAさんが学校や村に赴き、その地域の青少年をメンバーとするYFCの立ち上げと活動支援を行うようになったのは、配属先でのミーティング開催をスタートさせてから4カ月ほど経ったころだ。自転車の入手が叶い、地域に出向くことが可能になったのだ。

任期中にYFCの活動で訪問することができたのは、配属先の管轄地域にある小学校3校と中等学校2校のすべてと、5カ所の村。各YFCで扱う内容は、配属先で開いていたときとほぼ同様にした。参加者の人数は、学校では各

保健について学び合う青少年のグループ活動をスタート

医療施設に配属された野瀬さん。移動手段の確保が難しいこともあり、当初は施設内の業務の支援に終始したが、「あなた自身は何をやりたいの？」という同僚の言葉に一念発起。青少年への啓発に力を入れるようになった。

野瀬さんの配属先は、「ヘルスセンター」と呼ばれる一次医療施設だ。医師や看護師、助産師、薬剤師などの医療従事者が勤務していたが、管轄地域の急激な人口増加に伴い、その人数は任期中に急増。着任当初は7、8人だったが、終盤には倍増していた。野瀬さんが見出した役割は、地域住民に向けた健康教育の推進や、配属先の業務改善の支援である。

アウトリーチが停滞するなか

野瀬さんの派遣前の職は看護師。「感染症・エイズ対策」の職種で協力隊に応募したのは、「地域」を対象にした活動に取り組みたいという希望からだ。ところが、着任早々に壁に直面する。配属先は週に1日、施設内で乳幼児健診を実施していたが、遠方に住んでいるために来院できない子どもをフォローするため、スタッフが地域に出向いて乳幼児健診を行うアウトリーチを定期的に行うこととなっていた。ところが、野瀬さんの着任当初、配属先を所管する郡役所の予算執行が停滞しており、移動に必要なガソリン代がまかなえないため、アウトリーチがなされない状態が続いていた。移動手段を持っていなかった野瀬さんにとって、アウトリーチの車に便乗させてもらうのが地域に出向く唯一の方法だったが、それが叶わなかった。

野瀬さんやAさんが手始めに取り組むことにしたのは、「データブック」と呼ばれるスタッフが担当していた受付業務のサポートだ。そのかわりで、要請内容にも含まれていた整理整頓など配属先の業務改善も進められていった。

野瀬さんの着任後に配属先が初めてアウトリーチを行ったのは、着任2カ月後のことだ。1週間にわたり、各地域で5歳以下の子どもを対象に体重測定や予防接種、ビタミンAの投与などを集中的に行う国を挙げてのキャンペーンがあり、そのための予算が配属先を下りてきたのだ。野瀬さんも同行はしたが、住民への保健教育などを実施する余力はなかった。

その後、ふたたびアウトリーチは停滞。そうしたなか、「このままではいけない」との危機感を抱く出来事が起こる。データブックから、「この仕事はもうぎみの仕事だ」と、共同作業へのストレスを表現する言葉を伝えられてしまったのだ。着任して半年ほど経ったころのことである。

人の持ち場に割り込むのではなく、新たな役割をつくらなければ——。そう感じた野瀬さんは、同僚たちに「何か私にできることはないでしょうか」と聞いて回った。すると、返ってくるのは「あなた自身は何をやりたいの?」「と、野瀬さん自身の考えや思いを聞いてただず質問ばかり。そうして野瀬さんはあらためて、「地域住民の健康維持・向上の支援」「配属先の業務改善支援」の2つを自身の活動の柱にしようと考えを整理。それを、以前は黙って聞いていただけだった週頭の職員会議で発表したところ、それまで同僚たちに持た

ない。やむを得ず野瀬さんが手始めに取り組むことにしたのは、「データブック」と呼ばれるスタッフが担当していた受付業務のサポートだ。そのかわりで、要請内容にも含まれていた整理整頓など配属先の業務改善も進められていった。

野瀬さんの着任後に配属先が初めてアウトリーチを行ったのは、着任2カ月後のことだ。1週間にわたり、各地域で5歳以下の子どもを対象に体重測定や予防接種、ビタミンAの投与などを集中的に行う国を挙げてのキャンペーンがあり、そのための予算が配属先を下りてきたのだ。野瀬さんも同行はしたが、住民への保健教育などを実施する余力はなかった。

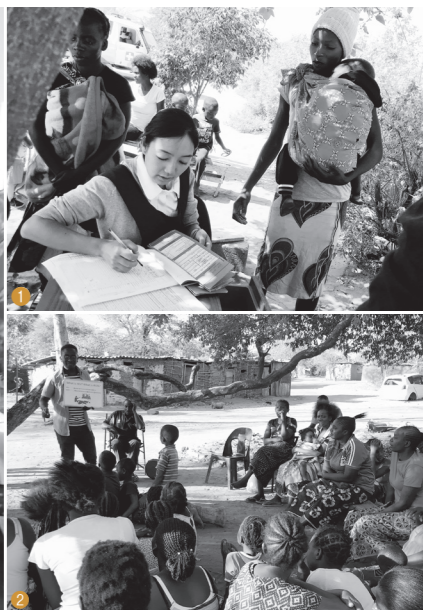
その後、ふたたびアウトリーチは停滞。そうしたなか、「このままではいけない」との危機感を抱く出来事が起こる。データブックから、「この仕事はもうぎみの仕事だ」と、共同作業へのストレスを表現する言葉を伝えられてしまったのだ。着任して半年ほど経ったころのことである。

人の持ち場に割り込むのではなく、新たな役割をつくらなければ——。そう感じた野瀬さんは、同僚たちに「何か私にできることはないでしょうか」と聞いて回った。すると、返ってくるのは「あなた自身は何をやりたいの?」「と、野瀬さん自身の考えや思いを聞いてただず質問ばかり。そうして野瀬さんはあらためて、「地域住民の健康維持・向上の支援」「配属先の業務改善支援」の2つを自身の活動の柱にしようと考えを整理。それを、以前は黙って聞いていただけだった週頭の職員会議で発表したところ、それまで同僚たちに持た

- 1 配属先で乳幼児健診の結果を記録する野瀬さん
- 2 村で開いたYFCのミーティングで講義を行うAさん
- 3 中等学校で開いたYFCのミーティングで講義を行う野瀬さん
- 4 YFCのミーティングで感染症の予防啓発ポスターを作成するメンバー
- 5 YFCのミーティングでHIVの感染リスクについて考えるアクティビティに取り組むメンバーたち



case 3 感染症・エイズ対策



特集 1 保健・医療分野の活動ポイント

校百数十人、村では20人程度という規模だった。配属先で行っていたミーティングに熱心に通っていたメンバーに同行を勧め、彼らに講師役を務めてもらうこともあった。

管轄地域内の各地で実施されたYFCは、活動を主導するコアなメンバーも誕生しており、野瀬さんの帰国後もAさんがファシリテーターとなって継続されているという。「トモミが来たから、この活動ができています。そんな感謝の言葉を口にしてくれた同僚やメンバーもいた。彼らの意欲を引き出し、つなぎ止めるうえでカギだったと野瀬さんが感じているのは、「約束を必ず守ること」だ。Aさんの不在時など、ひとりYFCの場を仕切ることに困難を感じるときもあったが、野瀬さんは決して「キャンセル」をしないよう努めた。それにより、青少年たちから「トモミは、やると言ったら必ずやる人だ」と信頼を寄せてもらうことができたのだ。



のせともみ 野瀬友望さん

(ザンビア・感染症・エイズ対策・2017年度2次隊)の事例

PROFILE

1988年生まれ、神奈川県出身。大学時代に看護師と保健師の資格を取得。卒業後、総合病院に看護師として勤務。2017年9月に青年海外協力隊員としてザンビアに赴任。19年9月に帰国。

活動概要

カズングラ地域ヘルスセンター(南部州カズングラ郡カズングラ)に配属され、主に以下の活動に従事。
●保健について学び合う青少年のグループ活動の立ち上げ・活動支援
●配属先の業務支援や業務改善

最初は配属先の周辺に住む青少年たちを配属先に集め、ミーティングを開くという形でスタート。中等学校に向いてYFCの立ち上げをアナウンスしたところ、数人から多いときで20人ほどの中高生によるミーティングが、週2回のペースで実現した。開催の時間帯は放課後である。内容は、HIV/エイズなどの感染症、若年妊娠など

始めたのは、任期が半ばにさしかかるころだった。

最初は配属先の周辺に住む青少年たちを配属先に集め、ミーティングを開くという形でスタート。中等学校に向いてYFCの立ち上げをアナウンスしたところ、数人から多いときで20人ほどの中高生によるミーティングが、週2回のペースで実現した。開催の時間帯は放課後である。内容は、HIV/エイズなどの感染症、若年妊娠など

同僚との二人三脚

その後、「地域住民の健康維持・向上の支援」として特に力を入れるようになったのは、青少年を対象とする活動である。ザンビアでは、地域の青少年が集まって保健について学び合う「Youth Friendly Corner」(以下、YFC)というグループ活動を、各地のヘルスセンターなどが推進している。野瀬さんが取り組んだのは、YFCが行われていなかった配属先の管轄地域で、その立ち上げと活動を支援することだった。

YFCのプログラムの存在を教えてくださいましたのは、ザンビアのほかの地域で活動する協力隊員。同僚たちにYFCの話題を持ちかけると、以前の職場で青少年への保健教育に携わったことがあり、YFCの実施に強い関心を持つ人が見つかった。臨床検査技師の男性(以下、Aさん)だ。そうして彼との二人三脚でYFCの立ち上げに取り組み始めたのは、任期が半ばにさしかかるころだった。

れていた「なんとなくいる人」という印象から脱却し、同僚のなかに活動への協力者を獲得することができるようになったのだ。

協力隊成果品
Pick Up
(保健・医療分野)



協力隊員が作成する成果品については、その共有・活用の促進を目的に、JICA青年海外協力隊事務局が「ボランティア成果品」として登録・保管する制度を設けています。成果品の登録・活用を希望する場合は、在外事務所にご相談下さい。

- 『**Texto del parto cariñoso**』
作 者：ポリビアの助産師隊員たち
内 容：「妊産婦とその家族を大事にした分娩ケア」を現地の医師・看護師・看護学生に普及・定着させるために作成した教材。「妊産婦の権利」や「日本のお産のあり方」などがまとめられている。
形 態：PDFファイルとDVD・スペイン語

- 『**Coma Sano × Viva Feliz レシピ集**』
任地で入手可能な食材ででき、低コスト・高栄養価である料理のレシピ集。3色食品群（栄養素の働きで食品を3グループに分けたもの）や食品衛生の解説なども盛り込まれている（PDFファイル・スペイン語/作=グアテマラの栄養士隊員）。
- 『**栄養啓発キット**』
15種類の野菜の栽培マニュアル。芽の種類や播種・収穫の時期、播種方法の違いなど学ぶことができる（PDFファイル・マダガスカル語/作=マダガスカルの看護師隊員）。
- 『**Infection Control Handbook**』
HIV/エイズや結核など、現地で多く見られる感染症の知識を伝える若年層向け教材（PDFファイル・英語/作=パプアニューギニアの感染症・エイズ対策隊員）。

協力隊
技術顧問
が回答

活動Q&A集

JICA海外協力隊員への技術支援を目的に配置されている技術顧問。派遣中隊員から寄せられた活動に関する相談と、それに対する技術顧問による回答の例をご紹介します。

Q1

「マンパワー」の役割ばかりが求められています

医療施設配属の感染症・エイズ対策隊員より

私はコミュニティ・ナースとしてエイズ予防の啓発活動や、配属先の業務改善支援をする目的で、ヘルプセンターに派遣されました。現在、配属先の日常業務を手伝うマンパワーとしての役割ばかりが求められています。例えば、パソコン作業に精通しているという理由で、外来の受付業務などに携わることを依頼されています。そのため、マンパワー以外の活動を計画し、実行していくことが難しい状況になっています。今後の活動方法についてアドバイスをお願いします。

A1

協力隊員は、配属先から日常業務をこなすマンパワーとしての役割を期待されることがたびたびあります。特に、臨床検査技師、診療放射線技師、薬剤師などの職種は、配属先で「検査業務」や「薬局業務」へのマンパワー支援が求められることが多い傾向があります。私は、一定のマンパワー業務への協力は配属先の活動を維持していくために必要ですので、許容していただくよう指導しております。

しかし、マンパワーとしての役割に100パーセント終始した場合、協力隊員の任期が終わり、帰国した後、その協力隊員の活動実績を含め、配属先に何も残らない状況になることが懸念されます。従って、当初はマンパワーとしての業務をある程度こなしながら、配属先スタッフの協力隊員に対する認知度を高め、信頼を得ることを目指すのは良いですが、その後は時機を見て、自分がやりたいと考える活動について配属先スタッフに向けてプレゼンテーションをする機会をつくり、彼らの賛同を得るよう努力してください。

ご質問に関連して、先輩隊員の活動例を紹介いたします。HIV/エイズ対策の活動を行うNGOに派遣されたある感染症・エイズ対策隊員は、当初、配属先の収



【回答者】
かみや しげる
神谷 茂さん
●JICA海外協力隊技術顧問
(担当分野: 医療)
●杏林大学保健学部長

入向上のための養鶏・養豚事業への専従を求められ、予定していたHIV/エイズ対策の活動がまったくできませんでした。そこで、JICA事務所の企画調査員（ボランティア事業）に間に入ってもらい、配属先の責任者と交渉した結果、業務の半分をエイズ孤児やHIV陽性者の支援活動に当てることが叶いました。

また、パソコンによる医薬品管理業務の支援を求められて赴任したある薬剤師隊員は、配属先スタッフの仕事ぶりが怠情だったことから、薬局で多量のマンパワー業務をこなさなければならぬ状況となりました。その協力隊員は、「上から目線」でスタッフを叱責するのではなく、「お願いだから、私の医薬品管理の業務を手伝ってほしい」と、スタッフに「依頼」するスタンスをとりました。合わせて、パソコンの立ち上げから各ステージでのパソコン操作に至るまでを彼らに「から詳しく教えていったところ、パソコン業務に自信をもった彼らは、その後、積極的に薬局業務に精を出すように変容しました。薬剤師隊員の大変賢明な対応ぶりに感心した次第です。

Q2

医療者としての行動に問題がある同僚について

病院配属の看護師隊員より

着任して半年が経ちましたが、配属先の同僚の行動に問題があり、どうアプローチすれば良いか悩んでいます。手洗いを行わない（上司の前では行う）、患者へのケアが雑、段取りが悪いため処置中に医療事故が起こりそう、亡くなった患者の扱いが酷い、空いた時間はお茶やおしゃべりをしたりスマホを使ったりと、医療者の行動として疑問です。

A2

着任当初は何もかも珍しい状態でした。ところが、半年も経つと配属先の様子が良くなり、日本の看護師と比べて知識・技術・態度など多くの違いが目について同僚に否定的になりがちです。自分の持つ知識・技術・態度が絶対に良くて、配属先の人に劣るすべてが悪いように思えてきます。これは誰もがたどる異文化適応の途中の段階なのですが、やがてその国の言葉に慣れ、配属先の人々のことが理解できるようになると、徐々に心理的バランスを取り戻します。

違いばかりが目につく時期を過ぎて少しずつ慣れてくるまで、協力隊員の場合は3〜6カ月、長い人では1年近くかかります。その間の時期をどう乗り越えるかですが、疑問に思える同僚の知識・技術・態度がどこから来ているのか考えてみましょう。なぜなのか尋ねてみましょう。同僚はどのような状態を「清潔」と考えているのでしょうか？ 患者になぜそのようにケアするのでしょうか？ 日本では熱い湯で行うことが好まれる清拭が、暑い国では嫌がられるなど、何かしらの理由で違うケアの方法が



【回答者】
もり よしえ
森 淑江さん
●JICA海外協力隊技術顧問
(担当分野: 看護)
●群馬大学大学院保健学研究科教授

行われていませんか？ 遺体に対する思いも、日本とは異なるのかもしれない。勤務の合間の、空いた、時間は、どの労働者にも必要とされる、疲労の蓄積を避けるための休憩時間と考えてはどうでしょうか？ 私たち日本人から見てもおかしいと思えるような行動でも、必ず理由があるはずですし、見方を変えること（自分が変わる）が活動の糸口となります。

以前、ラオスの病院の看護部長にお会いしたときのことです。10年以上前に協力隊員と現地の看護師たちが協力して作成した壁のポスターを前に、看護部長は説明してくれました。「協力隊員は看護師の行動で疑問に思ったことについて、必ず『なぜ?』と聞いてくれた。夜遅くでも、電話をして聞いてきた。それがとても良かった」と。いきなり決めつけて否定的に捉えず、必ず理由を確認してくれたことが、看護部長は大変嬉しかったそうです。この協力隊員の、上から目線でないかわり方があったからこそ、ポスターが10年以上たっても活用されているのでしょう。その元協力隊員と看護部長との交流は未だに続いています。

「信頼獲得」の道

CASE 1 相手を尊重する①

かすがいりな
春日井里菜さんの事例
(モンゴル・幼児教育・2017年度2次隊)



春日井さん
基礎情報

PROFILE

1994年生まれ、岐阜県出身。保育教諭として認定こども園に勤務した後、2017年10月に青年海外協力隊員としてモンゴルに赴任(現職参加)。19年10月に帰国し、復職。

活動概要

- 環境づくりや子どもとのコミュニケーション、製作活動などの方法の紹介
- 絵本の読み聞かせの導入支援
- 衛生指導の導入支援

春日井さんが配属されたのは、モンゴルの地方都市にある幼稚園。2〜5歳の子どもを受け入れており、おむね年齢別に分けられた40人ほどのクラスが6つあった。各クラスに配置されていたスタッフは、資格を持つ教員と資格を持たない補助員が1人ずつ。同園では「遊びを通じて子どもたちの考える力を伸ばす」という方針が掲げられていたなか、製作活動や体操な

どの新たなアイデアを提供し、園の方針に沿った保育内容を充実させることが、春日井さんに求められていた役割だった。

教室を抜け出してしまっ同僚たち

「現場をよく見てから活動を始めよう」。そんな心構えで着任した春日井さんは、着任すると

「表面」の問題だけでなく、「背景」にも目を向ける

幼稚園に配属され、保育の充実化の支援に取り組んだ春日井さん。当初、同僚たちに問題を指摘しても聞く耳を持ってもらえなかったが、彼女たちの置かれている状況への理解に努めたところ、距離を縮めることができた。

ボクシング仲間からヒントを

状況打開のきっかけとなったのは、「ボクシング」だ。春日井さんは当初、勤務時間が終わると寄り道はせずに帰宅し、寝るまでの時間は「YouTube」などを観て過ごすのが常だった。やがて「運動不足だ」と感じるようになった春日井さんは、任地にボクシングジムがあったことを知り、通うようになる。着任して半年ほど経ったころのことだ。レッスンは週3回で、スタートは夕方の6時。

当初はシンプルにボクシングを楽しむばかりだったが、3、4カ月経つと、ジム通いにもひとつのメリットが生まれる。ジムに通う老若男女のモンゴル人と友人になることができたのだ。当時、まだ同僚たちとは距離があると感じていた春日井さんにとって、気兼ねなく話せるモンゴル人の友人は、心の拠り所になった。

貴重なのは、休憩時間などにする会話のなかで、彼らがモンゴルについてさまざまな情報を与えてくれたことだ。「モンゴルは民主化の際、それまで庇護のもとにあったロシアから突然見放されたため、われわれはどのように国づくりをしていけば良いかわからず、苦勞してきたのだよ」。そんな話を聞き、それまで知らなかったモンゴルの人々の「背景」が見えて

くると、はたと春日井さんは気づいた。自分と同僚たちの仕事の「表面」だけを見て、否定してしまっていた。仲間として受け入れてもらうためには、彼女たちの仕事の「背景」にも目を向け、理解しなければならぬ。そうして、「同僚たちとの距離を縮めるために、できることからやってみよう」というポジティブな気持ちになれた春日井さんは、まずは次の3つを実践することにした。

- 笑顔で挨拶をする
- 振り返れば、同僚教員が子どもを叩くたびに、春日井さんは思わず渋い表情をしてしまっていた。それでは疎ましがられるのも無理がないと思つたことから、同僚教員たちへの朝の挨拶では、必ず「笑顔」を見せることにした。
- 多くの時間を共有する

会話や共同作業などなるべく多くの時間を同僚たちと共に過ごすことにした。

- 降園時にすべての子どもを見送る

子どもたちが降園する時間帯、玄関口に立つてひとりひとりに挨拶をすることにした。同僚との間でうまくいかないことがあつた日も、「最後の挨拶」をしっかりやるだけで、「明日もがんばろう」という気持ちになれたからだ。以上の3つを続けるうちに、やがて同僚たちとの関係は好転し始めた。彼女たちが春日井さ

まず、各クラスに1週間ずつ入り、保育の様子を見学させてもらった。そのなかで早速、同僚たちに共通する次のような問題が見えた。

- 騒ぐ子どもたちを落ち着かせるために、叩いたり怒鳴ったりする。
- 製作活動では、「上手か下手か」だけで作品を評価し、個性を伸ばそうとしない。
- 園庭で遊ばせる際、「遊ぶ様子からひとりひとりの興味・関心を察知し、それを伸ばす働きかけをする」といったことが欠けている。

春日井さんはその後、各クラスに1カ月ずつ入り、気づいた問題について、「こう変えたほうが良いのでは」と同僚にアドバイスするようになった。しかし、なかなか聞く耳を持ってもらえない。それどころか、疎ましがれる同僚もいた。

例えば、「手遊び」をすれば、怒鳴らなくても子どもたちは落ち着く」と伝え、春日井さんが手本を見せると、教室から出て行ってしまふ。やがて、春日井さんが教室に入ったとたんに出ていってしまう同僚まで出てきた。そうしてしばらくは、「自分は本当に必要なのか?」と自問自答する日々が続いた。

心に心を開き、お茶に誘ったり、休日に自宅に招待したりしてくれるようになったのだ。そういうプライベートでの付き合いを重ねていくと、おのずと仕事の不満や悩みなども打ち明けてくれるようになる。そうしてわかつたのは、彼女たちは叩いたり怒鳴ったりしているけれども、「子どもが好き」という点では、日本の保育者となら変わりがないということだ。「教員が処理しなければならぬ書類が多い」「他の園と行う『劇』などの大会が多く、他園に負けないよう訓練することが求められる」……。そんな事情から、同僚たちは心の余裕を持って保育をすることができないのだ。

そうした「背景」を理解したうえで同僚たちの振る舞いを見ると、日本の保育者のように「じっくり子どもの話を聞く」といったことはしていないものの、たしかに「あなたのことは好きだよ」という気持ちが伝わるような表情を子どもに向けていることがわかつた。

「リナはモンゴルが好きなんだね」。そんな言葉をかけられるようになり、同僚たちとの信頼関係ができたと感じた春日井さんは、あらためて「手遊び」や「読み聞かせ」など、日本の幼稚園で行われているアクティビティーを紹介すると、以前は教室を出ていった同僚たちも、実践してくれるようになったのだ。

Lesson 1

~春日井さんの事例から~

「配属先外」の友人に学ぶ

同僚との関係構築につまずいた際、同僚以外の現地の人から解決のヒントが得られる可能性がある。現地の人ならば、「同僚が置かれている状況」や「同僚が協力隊員をどう見ているか」などの見当がつくからだ。

- 1 子どもたちを集中させる際に、「叱る」のではなく、「手遊び」で注意を引きつけるようになった同僚
- 2 子どもにもわかりやすいマニュアルを手洗い場に貼ったところ、食事前の手洗いが定着した
- 3 春日井さんが「紙芝居の作り方」を紹介したところ、同僚の発案で園児自身が紙芝居をつくって発表するというアクティビティーが導入された
- 4 春日井さん(右から3人目)が開いた製作活動の勉強会に参加した同僚たち
- 5 通っていたボクシングジムのインストラクター(右)と春日井さん
- 6 同僚(左端)の自宅に招待された春日井さん(右から2人目)



上司や同僚、活動対象の住民、教え子など、活動でかかわる現地の人との信頼関係は、協力隊員にとって活動の基盤となるもの。それを築くうえで大切な心構えや有効な方法について、各種の事例を通して整理する。

CASE 2

相手を尊重する②

後藤真美さんの事例
(ドミニカ共和国・コミュニティ開発・2017年度2次隊)



後藤さん
基礎情報

PROFILE

1987年生まれ、宮城県出身。歯科衛生士として歯科診療所に8年間勤務した後、2017年10月、青年海外協力隊員としてドミニカ共和国に赴任。19年10月に帰国。

活動概要

NGO「小児口腔予防衛生協会」がアルタグラシア県イグエイ市で運営する歯科診療所「ソリサ」に配属され、主に以下の活動に従事。

- 学校や村での歯科保健指導や栄養指導
●配属先の患者を対象にした歯科保健指導や栄養指導

後藤さんが配属されたのは、NGOが地方の町で運営する歯科診療所。数人の歯科医師と歯科助手が診療を担当する一方、歯科保健指導に専従する職員も配置されており、学校や村を回るなどして講習を行うことになっていた。歯科保健指導の職員をカウンターパート（以下、CP）とし、指導の質向上を支援することが、後藤さんに求められていた役割だった。

ボタンのかけ違い

着任時までに適当な住まいが見つからなかったため、後藤さんは当初、CPが母親と共に暮らす家に間借りさせてもらうことになった。プライベートで長い時間接することになる状況は、人間関係を早々に築くことが容易になる一方、ボタンのかけ違いがあれば、かえって「仲違い」の温床になってしまう恐れもある。後藤さんとCPのケースは、後者に転んでしまっ

た。任地のアルタグラシア県イグエイ市は、ほかの地域の人々もそう指摘するほど、ドミニカ共和国のなかでも特に敬虔なキリスト教徒が多く住む町だった。市内には多くの教会があり、住民は熱心にミサに通う。CPも同様だった。午後5時に仕事が終わわり、帰宅して食事を済ませる

そうして、活動の滑り出しは困難を極めた。CPは学校で行う歯科保健指導への同行を認めてくれたものの、「共に行う」という姿勢は見せてくれず、与えてくれた役割は「日本」についての話をすることだけだった。CPが歯科保健指導で使っていた教材は口腔と歯ブラシの模型だけだったため、図解する教材などをつくる必要を感じたが、「一緒に作りましょう」という誘いにCPは乗ってくれない。さらに、配属先で患者に歯科保健指導をすることが行われていなかったため、待合室で講習を行うことを提案してみたが、やはり聞く耳を持ってもらえなかった。そうしてしばらくは、待合室にいる患者に対して、個別に歯科保健指導をして回るだけの日々が続いた。

雨降って、地固まる

ホームステイ先が見つかったことから、CPの家は1カ月ほどで出ることができた。プライベートで顔を合わせる時間が減ると、後藤さんのストレスも多少和らいでいく。そうして「同僚たちとの関係をどうにか改善しよう」という気力が出てくると、食べ物のお裾分けをしつつ、仕事以外の話題で会話を切り出してみるようになった。すると、やはりよそよそしさは消えないものの、会話には応じてもらえるようになった。そんななかでようやくわかってきたのは、任地の人々にとっていかに「宗教」が重要であるかということだ。「神は国籍や言語を選ばない」「私が通う教会の牧師はいつでも笑顔だ。だから私もそうありたいと思ってる」……同僚たちからそんな言葉を聞き、後藤さんはミサに通って汚名を挽回したいと思っただけで、今さら彼女たちに「連れて行ってほしい」と言い出す勇気はなかった。

すると、近所の教会で7時から始まるミサに連日、足を運んでいた。

CPに誘われ、後藤さんが初めて一緒にミサに参加したのは、彼女の家で暮らし始めた日の翌日だ。キリスト教徒ではなかったが、プライベートでの付き合いを深めることは、信頼関係の構築に不可欠だと考えがあった。しかし、ミサは思いがけず苦痛の大きなものだった。スピーカーから大音量で宗教音楽を流しながら、牧師がマイクを使って大声で聖歌を歌う……。そんなミサが3、4時間に及んだ。「つらい」と感じたが、翌日もCPに誘われ、断わるのは気が引けたために参加。3日目、やはりCPに誘われたが、思い切って断ってしまった。言葉を尽くして理由を説明すれば良かったのかもしれないが、当時のスペイン語力ではそれは難しかった。

CPはその後、後藤さんをミサに誘うことはなくなった。同時に、配属先でも家でも、にわかには後藤さんへの態度がよそよそしくなってしまった。それどころか、CP以外の同僚や、買い物をする店の人々までもが、後藤さんに笑顔を見せなくなる。後にわかったことだが、教会に行くことを嫌がった後藤さんについて、「不真面目な外国人」との噂が広がってしまったのだ。

のは、任期も半ばに差し掛かるころだ。配属先に新たに歯科助手の女性が着任。過去を知らないためにわだかまりなく接してくれ、ミサにも誘ってくれたことから、連れていってもらうようになった。すると、「後藤さんが教会に通うようになった」という噂が瞬間に広まり、CPを含む同僚たちの態度が変化。にわかには心を開き、食事などに誘ってくれるようになったのだ。

人間関係の変化は、活動にも影響した。CPは教材のつくり方について後藤さんにアドバイスを求め、共につくってくれるようになったほか、配属先の待合室での講習も開始。配属先や学校で行う講習では、後藤さんに歯科保健の話を振ってくれるようになった。ほかの同僚たちも同様だ。会議の場などで、「あなたの意見を聞かせてほしい」などと振ってもらえることが出てきたのだ。

CPとの関係は、以来、強固なものとなった。後藤さんの任期が残り半年ほどとなったころ、彼女は退職し、それまで歯科保健指導に通っていた学校のうちのひとつに就職した。すると、「歯科保健指導をするので力を貸してほしい」と後藤さんに依頼。配属先の所長の許可のもと、後藤さんはたびたびその学校に赴いて、教材づくりを手伝うようになったのだ。

Lesson 2

～後藤さんの事例から～

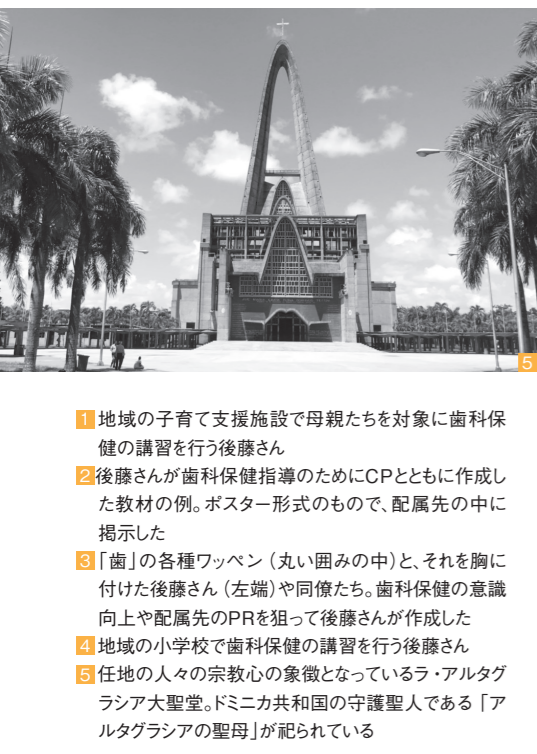
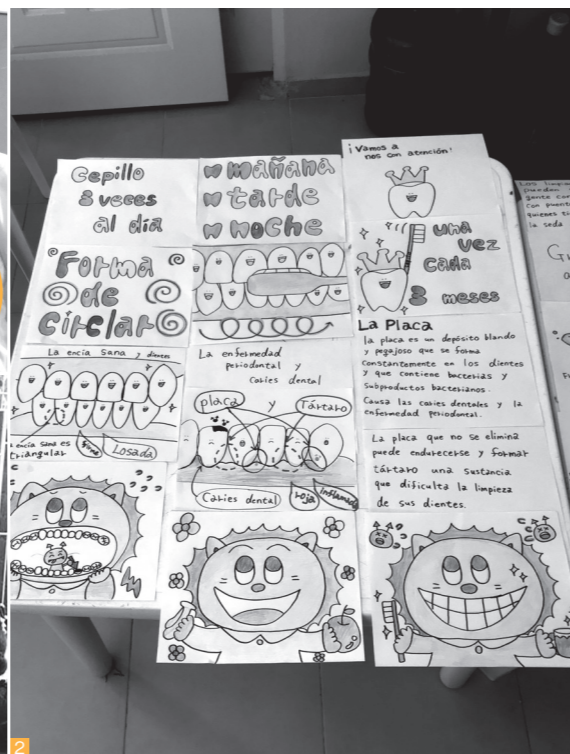
「新人」の助けを借りる

配属先で「四面楚歌」になってしまった場合の挽回のチャンスは、「新人職員」の着任だろう。わだかまりなく付き合ってくれるその職員と関係を築けば、ほかの同僚たちとの間をつないでもらえる可能性があるからだ。



相手が価値を置くものには、細心の注意と最大の敬意を払う

歯科診療所に配属され、歯科保健指導に取り組んだ後藤さん。同僚たちとの信頼関係づくりにおける鍵だったのは、任地の人々にとってきわめて大切な「宗教」への配慮だった。



- 1 地域の子育て支援施設で母親たちを対象に歯科保健の講習を行う後藤さん
2 後藤さんが歯科保健指導のためにCPとともに作成した教材の例。ポスター形式のもので、配属先の中に掲示した
3 「歯」の各種ワッペン（丸い囲みの中）と、それを胸に付けた後藤さん（左端）や同僚たち。歯科保健の意識向上や配属先のPRを狙って後藤さんが作成した
4 地域の小学校で歯科保健の講習を行う後藤さん
5 任地の人々の宗教心の象徴となっているラ・アルタグラシア大聖堂。ドミニカ共和国の守護聖人である「アルタグラシアの聖母」が祀られている

自分を発信する①

平出将孝さんの事例
(東ティモール・手工芸・
2017年度2次隊)



平出さん
基礎情報

PROFILE

1985年まれ、福島県出身。市役所に事務職として勤務するかたわら、実家が営む竹材業を手伝いながら、竹細工の技術を習得。2017年10月、青年海外協力隊員として東ティモールに赴任(現職参加)。19年10月に帰国し、復職。

活動概要

- 東ティモール観光省芸術・文化総局(ディリ)に配属され、主に以下の活動に従事。
- 住民グループによる竹細工の制作・販売の支援
- 伝統工芸品の販売店を紹介する観光客向けマップの作成
- 伝統工芸を生かした商品の企画

平出さんが配属された東ティモール観光省芸術・文化総局は、同国の芸術・文化の発展を目的とする事業を行う機関。同僚たちはそれぞれ「踊り」や「音楽」などの専門性を持っており、それに関連する事業を担当する体制となっていた。そうしたなかで平出さんに求められていた役割は、専門性を持つ同僚がいなかった「手工芸」の分野で、生産者を対象に商品の質向上などを支援することだった。

「販売店マップ」で同僚の関心を引く

「着任したら、制作技術の指導を熱心に求められることだろう」。そんな淡い期待を抱いて着任した平出さんだったが、現実とは違った。国内には、指導対象とすることができそうな手工芸品の生産者グループがいくつもあった。ところが、「予算不足」を理由に、配属先から指導の開始に「待った」がかかったのだ。技術指導の講習などに人に集まってもらう際、現地では主催者が食事を振る舞うことになっており、配属先はその費用が出せないというのだった。人間関係ができていないなか、同僚たちは平出さんのことには無関心で、ほかの仕事を与えてはくれない。「マサの仕事は『待つこと』だ」。そんな言葉で突き放されてしまった。

竹細工づくりの姿が共感を呼ぶ

「目に見えるもの」をつくり、自分自身の存在をアピールするという方法は、販売店マップ以外にも有効な場面があった。自作の「竹細工」を名刺代わりにしたところ、その指導をするチャンスを与えてもらうことができたのだ。

平出さんの実家は竹の卸業を営んでおり、派遣前、5年にわたって竹細工を学んでいた。そのため、当初から竹細工づくりの指導をメインの活動にしたいと考えていたが、着任当時、竹細工は現地の人にとって無縁のものだった。そこで、まずは自ら竹細工をつくり、同僚たちにその魅力を知ってもらうことにした。「マサの仕事は『待つこと』だ」と言われていた、任期前半のことである。

任地を歩き回り、庭先に竹が生えている家を見つけては譲ってもらい、土日に自宅で竹細工のかごなどをつくった。できた作品は配属先に持参。同僚たちに見せると、彼らは販売店マップのときと同様、関心を示してくれた。やがて、上司にあたる芸術・文化総局長からの依頼で、同僚たちを対象に竹細工の技術を教える講習会が実現。「竹細工の専門家」というステータスを配属先のなかで獲得することができたのは、着任して半年ほど経ったころだった。

自作の竹細工は、販売店マップをつくるためにタイスの生産者グループを回る際にも持参。「私はこういうものがつくれます」とアピールしていると、「つくり方を教えてほしい」とリクエストするグループが現れる。食事を振る舞うことも求められなかったことから、平出さんはそうしたグループを継続的に訪ね、竹細工の指導を行うようになった。

現地の人たちは植物の葉でかごをつくる技術は持っており、「編む」ことには慣れていて、彼らが手こずったのは、竹を割って薄く剥ぎ、

じつとしていても埒は明かないと考えた平出さんは、「できること」を自力で探し始める。そうして任期の前半に取り組んだことのひとつは、観光客に向けた手工芸品の「販売店マップ」の作成だ。東ティモールの代表的な伝統手工芸は、「タイス」という草木染の綿織物。地域ごとに固有の模様を代々伝えていたのが特徴で、その生産者グループがいくつもあった。しかし、同僚たちにタイスの販路について尋ねたところ、その情報が集約されてはいないということがわかった。そこで平出さんは、タイスの生産者グループを回って卸先を聞き出し、販売店マップにまとめることにしたのだった。

調査が進み、販売店のリストが充実してくると、平出さんは試みにそれを同僚たちに見せてみた。すると、彼らはようやく平出さんに対する関心を持ち始める。リストにまだない販売店の情報を提供してくれたり、現地語の正しい表現を教えてくださいたりするようになったのだ。

「販売店マップをつくる」という発想は、それまで配属先にはなかったもの。平出さんが完成させると、その意義を感じた同僚が、観光ホテルや空港などへの配布に付き合ってくれた。そうして、配布先から「こういう資料が欲しかった」といった感想が出ると、同僚は「いい仕事できたね」と称えてくれるのだった。

編める状態にする「ひごづくり」だ。その習得でつまづき、継続が難しいグループが続出するなか、その壁を乗り越えて平出さんとの関係を続けてくれたグループが一つだけあった。タイスの古い織り方の復興などに取り組む「ティモール・エイド」という名のNGOだった。

幸運だったのは、ティモール・エイドの建物に平出さんの家から歩いて2、3分の距離にあったこと。平出さんは任期中、土日に竹細工をつくることを継続したが、ティモール・エイドと出会ってからは、その建物を作業場とさせてもらった。黙々と竹細工づくりに取り組む平出さんに、メンバーは信頼を寄せるようになり、竹細工づくりへの意欲を強めてくれたのだ。

30人ほどいたメンバーのうち、竹細工に熱心に取り組むようになったのは4、5人。平出さんから基本的な技術をひととおり教わると、インターネットで調べるなどして、平出さんが教えていないデザインのかごをつくるようになった。そうしてつくりためたカゴやランプシェード、壁掛けなどの作品の展示会を開催できたのは、平出さんの任期が終盤に入った時期。その場で注文をもらうことができ、平出さんの帰国後も生産・販売が継続されることとなった。現在は、離島の住民に竹細工のつくり方を指導する活動も開始しているという。

Lesson 3

～平出さんの事例から～

「手間」をかけた自己表現

周囲から信頼を得るためには、自分の技術や思いを理解してもらうことが不可欠。手間隙をかけて行った調査やつくった物であれば、技術や思いがいつそうわかりやすく伝わる可能性が高いだろう。



「見てわかる物」で
自分が秘める
技術や思いをアピール

芸術や文化の振興に取り組む中央省庁の部局に配属された平出さん。同僚や住民との関係づくりで「名刺代わり」となったのは、自作の竹細工など、自身の技術や思いが伝わる「物」だった。



Lista Loja Artezanatu sira iha Dili

No.	Foto	Nome	Enderezu(Paralela)	Teléfonu	Ora servisu	Períodu	Prezizaun
1		Alma Espiranza	Dili	7723-3600	09:00-15:30(Seg)	Sabado, Domingo	Ita Tais hean no Tais hean sara Tais.
2		Alma Foundation	Rua Braga de Madalena, Mananhera Marçal Lane	7723-3600	09:00-15:30(Seg)	Sabado, Domingo	Ita Tais no Tais antigo hean.
3		Arte Maico	Avenida dos Martires de Paris, Camoes	**	08:00-18:00(Seg-Sab)	Domingo	Personas edulhara no Arte antigo hean.
4		Artes de Alamos	Rua José Maria Marques	7797-6528	08:00-16:00(Seg-Sab)	Domingo	Handika no paes fozes no hean bala no Alamos.
5		Artes de Alamos	Rua de Lamas, L. Fanc, Alamos	7726-6284	09:00-17:30(Seg-Sab)	Sabado, Domingo	Artesanato no produtos tradicionais bala no Dili no Alamos.
6		Artes de Alamos	Avenida Das Divorcias, Mananhera, Nelas Lucidara	7728-7500	09:00-17:00	**	Plata no Arte antigo hean.
7		Artes de Alamos	Artes de Alamos	7718-8377 7546-7743	09:00-17:00	**	Ita ai, artesanato original no Dili Alamos.
8		Artes de Alamos	Rua de Lamas, L. Fanc, Alamos	7733-4400	09:00-17:30(Seg-Sab)	Sabado, Domingo	Tais antigo hean.
9		Artes de Alamos	Avenida de Portugal, Dili	7784-2854 7783-0808 7733-3112	09:00-18:00(Seg-Sab)	Domingo	Artesanato no produtos tradicionais Tais.
10		Artes de Alamos	Luzadas, Mananhera	7783-3113 7728-3113	09:00-18:00(Seg-Sab)	Domingo	Artesanato no produtos tradicionais Tais.
11		Artes de Alamos	Rua de Lamas, L. Fanc, Alamos	7732-3600	09:00-18:00	**	Artesanato no produtos tradicionais Tais.
12		Artes de Alamos	Rua de Lamas, L. Fanc, Alamos	7734-7127	09:00-18:00(Seg-Sab)	Domingo	Tais, artesanato tradicional hean.
13		Artes de Alamos	Rua de Lamas, L. Fanc, Alamos	331-2200	09:00-17:00(Seg-Sab)	Sabado, Domingo	Tais original no balahean, bala hean cultura Timor.

*Favor ida fo hatene mai ami, kuanha ita loja webik kama ho artesanato sira. (733114124.R.inf@govtim.gov.tl) 08/2018

- 1 ティモール・エイドのメンバー(右端)とともに離島に赴き、住民に竹細工の指導をしたときの様子
- 2 竹を編んで模様を付けた壁飾り。ティモール・エイドの作品で、人気商品のひとつとなった
- 3 平出さんの任期終盤にティモール・エイドが開いた竹細工の展示会で出品されたかごの数々
- 4 任期前半に作成したタイスの販売店マップ
- 5 竹のかごを編むティモール・エイドのメンバー

CASE 4

自分を発信する②

いわせ 岩瀬さくらさんの事例
(ペルー・青少年活動・
2017年度2次隊)



岩瀬さん
基礎情報

PROFILE

1986年生まれ、福岡県出身。久留米大学医学部看護学科を卒業後、看護師として大学病院の救命救急センターに勤務。2017年10月、青年海外協力隊員としてペルーに赴任。19年10月に帰国。

活動概要

ピラウ州立サンミゲル児童保護施設(ピラウ州ピラウ市)に配属され、主に以下の活動に従事。
●学習、菜園づくり、料理などの指導(現地
の大学生たちとの協働)
●空手の指導(現地の空手家との協働)

岩瀬さんが配属されたのは、育児放棄などにより家庭での生活が難しい子どもを受け入れ、生活の場を無償で提供する児童保護施設。0〜18歳の約50人の子どもが寝食を共にし、そこから学校に通うなどしていた。配置されていたスタッフは、施設長と副施設長、社会福祉士、心理士のほか、洗濯や料理など子どもたちの生活の面倒を見る約10人の世話係など。本来、自立に資するアクティビティも行うことになっていたが、着任当時、人員不足のため実践されていない状態だった。それをスタートさせることが、岩瀬さんに求められていた役割だった。

チャンスに飛び込む勇氣

アクティビティを定着させるためには、配属先外の人と関係を築き、その助力を得る必要がある。岩瀬さんは着任した当初から、このことを意識するようになった。年代がさまざまな50人の子どものアクティビティを一人こなしするのは容易ではないうえ、一人でこなしでも自分の帰国後に継続されないと考えたからだ。同じ任地で活動していた環境教育隊員(以下、A隊員)にそうした悩みを相談したところ、着任の2カ月後にひとつの出会いを得ることができた。任地にあるピラウ大学の学生で

構成する環境系NGOである。出会いの場は、A隊員がその環境系NGOのメンバーを対象に開いた「コンポスト」の講習会。岩瀬さんはA隊員に誘われ、それを見学していた。講習会では、A隊員による講義が終わると、学生の引率役で参加していた大学教員が、「コンポストづくりを試験的に始めよう」と呼び掛けた。それを聞いて「チャンスだ」と感じた岩瀬さんは、まだスペイン語力は心もとなかったにもかかわらず、すかさず立ち上がって発言。配属先の事業を説明したうえで、「コンポストづくりを私の配属先で始めませんか」と提案した。出来たコンポストを使って子どもたちが野菜や果樹の栽培をすることができれば、配属先の収入源にもなります……。配属先でコンポストづくりを行うメリットを、藁をもつかむ思いで訴えた。すると、受講していた大学生や引率役の大学教員が、岩瀬さんの熱意に賛同。配属先をコンポストづくりの最初の試行の場にすることを、その場で決めてくれたのだ。

講習会の翌月に大学が長期休暇に入ると、環境系NGOのメンバーたちが配属先にやってきて、コンポストづくりのファシリテーター役を務めてくれるようになった。彼らはさらに、「ダンス教室」や「料理教室」など、ほかのアクティビティの立ち上げにも積極的に取り組んでくれた。

大学の長期休暇が終わり、アクティビティを岩瀬さんがひとりで担う状態になってまもない時期、環境系NGOのメンバーの友人による発案で、配属先の支援を行う新たなNGO「MUNAY Perú & Japan」が立ち上げられた。メンバーは地元の大学生たちだ。以後、大学の学期中は毎週土曜日に、長期休暇の間は隔日、メンバーが配属先を訪れ、各種アクティビティを行ってくれるようになった。通常の家庭で親が子どもにしているように、大人が配属先の子どもの「一対一」で向き合う時間が何より重要だと岩瀬さんは考えていたが、大勢の大学生が配属先に来ることで、それが継続的に実現するようになった。

「人間対人間」の関係構築

スペイン語の力が付いた任期後半は、配属先外の人と信頼関係を築く方法も変化する。前述の環境系NGOに対して試みたように、闇雲に「熱意」を表して協力を求めるというやり方は封印。会話の積み重ねにより、自分の立場や活動を抜きにして、まずは自分の人間性を丸ごとさらせてもらうようになったのだ。

そうして任期後半に新たに得た協力者のひとりが、任地で空手道場の指導者を務めていた青年(以下、Bさん)だ。岩瀬さんは高校生と大学生のときに空手をやっていたことから、配属先でも希望する子どもに空手の指導をしていた。そのことを人づてに知った他州の道場の人からの勧めで地元の大出たところ、そこで際立つ技術を見せていたBさんと出会う。岩瀬さんは「配属先で空手の指導をしてほしい」と思ったが、それを前面に出すことは自粛。まずは「人間対人間」の関係を築こうと、自分の

立場や活動について知らせないまま、たびたび道場を訪ねては、練習に参加させてもらうようになった。そうしてBさんとの会話を重ね、信頼関係ができたと感じられたところで、「実は……」と切り出し、児童保護施設で活動していること、そこで空手の指導をしていることなどを打ち明ける。「それならば」と、Bさんは配属先に定期的に空手の指導をするようになってくれた。

「僕の家庭も裕福ではなかった」「貧しい子どもたちがいる地域でも空手を教えている」。Bさんがそう打ち明けてくれたのは後のことだ。9歳のころに空手に出会い、生きる術を得たことだった。「空手が僕を救ってくれた」。これが彼の口癖で、困難な環境に生まれ育った子どもたちの人生に何かしらの光をとの思いが強い人だった。

以上のように、ピラウ大学の学生やBさんなど、「配属先外の人」との信頼関係づくりが目指していた到達点は、彼らと岩瀬さんとの強固な関係ではなく、彼らと配属先の子どもの間との強固な関係だ。任期中にその構築がどこまでできたかは不安だったが、帰国した現在も、ピラウ大学の学生からは「配属先への関与を続けている」との連絡が入っているという。

※「MUNAY」はペルーの先住民であるケチュアの人々の言葉で、「愛」を意味する。

Lesson 4

～岩瀬さんの事例から～

「自己発信」の機会希少

活動で配属先外の人を借りる必要がある協力隊員も少なくないだろう。配属先外の人に自分を知らせてもらう限られたチャンスを生かすためには、語学力不足などで発言を躊躇してしまうことは禁物だ。

その時々々の語学力に応じて、「自己発信」の方法が変化

児童保護施設でアクティビティの充実化に取り組んだ岩瀬さん。配属先の人員が不足していたなか、配属先外の人と信頼関係を築き、その助力を得ることが、活動の最重要課題だった。

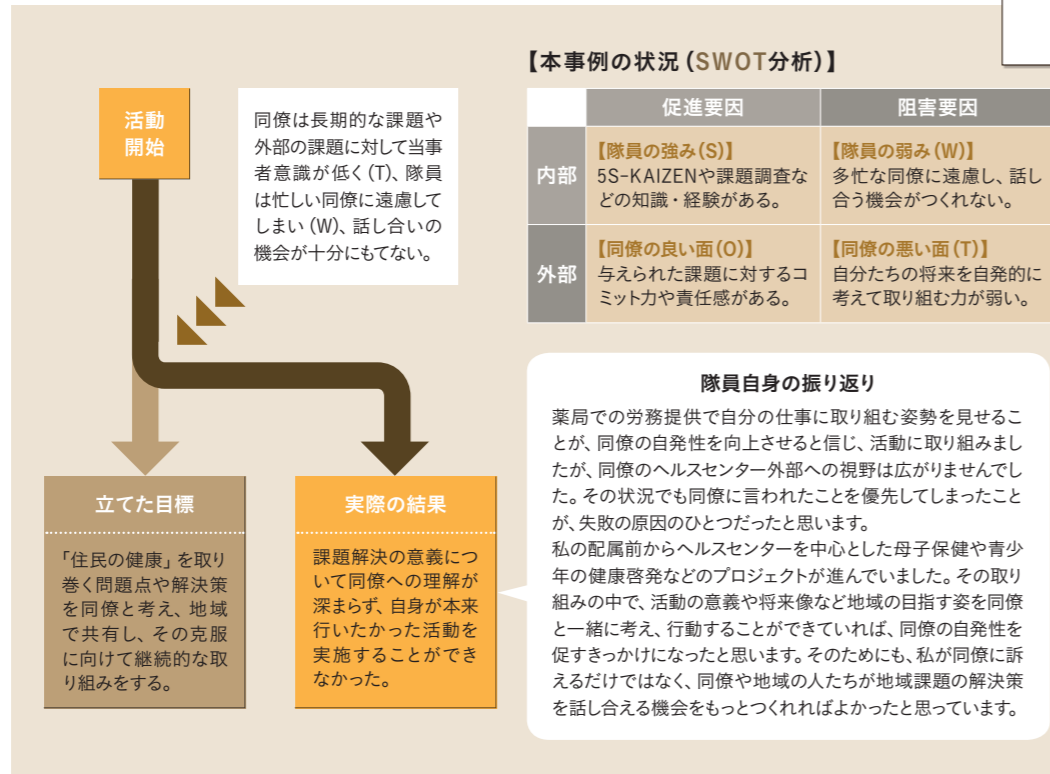


- 1 ピラウ大学の学生が配属先を訪れて実施した料理教室
- 2 配属先の子どもの空手指導をする岩瀬さん(右)。苦手意識のある子ども、「一対一」なら慕ってきた
- 3 配属先で空手教室を行うBさん
- 4 自分たちの手で育てたカボチャを手にする配属先の子どもたち
- 5 A隊員とピラウ大学の学生たちの協力により配属先で始まった、コンポストを使った野菜づくり
- 6 配属先に定期的に通ってくれるようになった「MUNAY Perú & Japan」のメンバーと配属先の子どもたち

“失敗”から 学ぶ #179



事例整理



マンパワーに徹しすぎ、計画した活動を 実行に移す時間を失ってしまった

文 西泰佑さん(ザンビア・コミュニティ開発・2017年度2次隊)

私はザンビアのンボングウエ郡にあるミカタヘルスセンターに初代隊員として配属されました。まずはできるだけ何でも取り組み、その過程で気づいたことを活動に反映していこうと、活動を始めました。最初に着目したのはヘルスセンターの薬局業務でした。薬局では住民との交流や情報収集が見込まれると考え、それに応じた働く環境づくりのための5S-KAIZEN活動に着手。生産性や患者満足度が向上したことから、この活動は大変評価されましたが、それ以降マンパワーとして日々の薬局業務のすべてをこなすことを求められました。

薬局での住民との交流で、地域の人々に対する健康啓発の必要性を感じた私は、地域でのワークショップ(WS)開催を同僚に提案しました。しかし、同僚の返事は、「政府やNGOの開催するWSでは軽食や日当の支給が通例であり、その予算がないので住民は集まるわけがない」と反対。日常業務の多忙さや、同僚の仕事を増やすことに申し訳なさを感ず、薬局から出ることはできませんでした。配属先で啓発活動は行っていました。が、1年が経過してもなお「もったでき

ることがあるのに」と葛藤する日々が続きました。そこで、多くの住民の生業である農業をおして収入向上や健康啓発を行いたいと思い、農家を訪問し、SHEPの導入を試みました。これに対し、同僚から「薬局業務に集中しろ」「外でサボって身勝手だ」などと言われ、理解を得るのが困難でした。わずかな時間を利用して、施設内で個別に健康啓発活動を行い、同僚に健康に関する住民の課題やその解決策を共有はしていました。が、行動に移せませんでした。

活動終了まで半年。薬局業務と時間に余裕がでてきたことから、住民生活に身近な養鶏を通して栄養改善や収入向上について考えてもらうため、周辺住民の訪問を再開。ヒヨコの生存率向上を指導したところ、熱心に改善に取り組む住民の姿が見られ、そのことから住民の興味や関心事をおして成功体験をつくることに、自分の役割だったと痛感しました。

同僚から仕事を請け負った結果、本来やりたいことをやる時間を失ってしまったことへの反省。もっと活動のビジョンについてしっかり話し合い、理解を得ることが必要だったと思います。

他隊員の分析

「自分がやりたいこと」を「相手が求めること」に

できることにどんどん取り組む姿勢は決して間違っていないと思います。しかし同僚からのイメージが固まってしまったため、そこから視野を広げにくくなってしまったかもしれません。計画を実行に移すには、日常から同僚の希望を拾い集め、そこに自分がやりたいことをさりげなく関連させていくことが大事だと考えます。その際、同僚の発案だと思ってもらうことで自発的な行動につながり、実現性が高まります。私の活動では、既存のイベントの成果を上げるための手段として私がやりたかった科学館見学を盛り込み、計画の実現につなげました。

文=協力隊経験者

- アフリカ・理科教育・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

首都の小学校で理科の実践的な授業を目的に活動を行った。現地教員と協力して日々の授業にグループ実験を取り入れるとともに、「科学を楽しく」をモットーに科学館見学や校内発表会を企画・実施した。

同僚にとっての最善の利益を考える

配属直後に配属先で取り組むべき課題がすぐに見えたときは、「何かをしなくてはいけない」という焦りを感じてしまいます。しかし、新企画の提案などはもう少し同僚の状況を把握したあとに示したほうがよかったかもしれません。同僚が多忙なときはマンパワーになりながらも、新規プロジェクトが「同僚の収入に直結するか」「同僚のモチベーションや評価になるか」などを見極め、そのうえで新しい取り組みを推奨しつつ、既存のプロジェクトの内容を充実させるための改善策を話し合えればよかったのではないかと思います。

文=協力隊経験者

- アジア・コミュニティ開発・2015年度派遣
- 取り組んだ活動

子どもの虐待防止のプログラムを立ち上げ、冊子を作成。また、その冊子の内容をワークショップ形式で地域コミュニティに広めるために、赤十字の職員やボランティアからファシリテーターを養成するなど、子どもの虐待防止研修プログラムも作成した。



同僚と実施したマラリアのワークショップ。妊産婦検診や乳幼児検診の絡みに健康啓発のワークショップをすることが慣例となっていた。西さんが作成した教材を使用して実施し、「同僚たちがときには例え話や笑いを交えて現地語で話をしてくれました。同僚たちが得意な話題のときには熱が入り、小一時間話をすることもありました」と西さんは話す。



PROFILE

1987年生まれ、福岡県出身。2010年に京都工芸繊維大学工学部生体分子工学課程を卒業後、製薬会社に約7年間医薬品の営業活動に従事。退職し、17年9月、青年海外協力隊員としてザンビアに赴任。19年9月に帰国。

活動概要

- ミカタ地域ヘルスセンターにて、同僚やコミュニティボランティアと共に、同センターを中心とした地域住民の生活レベルの底上げのため、主に以下の活動に取り組む。
- 住民や同僚と地域の抱える課題の調査
- マラリア対策、下痢予防、母子保健などの推進
- 5S-KAIZENなどを使ったヘルスセンターの円滑な運営サポート

*SHEP…Smallholder Horticulture Empowerment & Promotionの略。小規模園芸農家支援

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#C110

農林統計

派遣中 ▶ 0人

累計 ▶ 17人

分類 ▶ 農林水産

活動例 ▶ 農業生産・研究の向上を目指す
データの調査や提案などを行う

類似職種 ▶ 統計

※人数は、2020年1月31日現在。



農民へのインタビュー調査をする藤さん(左)。調査中に農民から「稲作技術研修で稲作についての知識や適切な管理の仕方を学んだことによりコメの収量が増加した。収入が増えたことにより、子どもの学費などを賄うことができるようになった」という嬉しい話も聞くことができたそうだ

PROFILE

1992年生まれ、茨城県出身。2015年日本大学を卒業後、修士課程に進学し、ミャンマー山岳地帯における社会開発について研究に従事する。博士課程在学中の17年6月、青年海外協力隊員としてウガンダに赴任。19年6月、帰国。現在は、隊員時に配属されていたJICA技術協力プロジェクトで専門家として働いている。

活動概要

国立農作物資源研究所に配属され、ウガンダにて実施されている技術協力プロジェクト「コメ振興プロジェクト」の効果を増やすためにインパクト調査を実施した。主な活動は以下のとおり。
●プロジェクト対象地域における農民へのインタビュー調査
●インタビュー調査を基にしたプロジェクトへの改善案の提案



しとみだい き
藤 大輝さん
(ウガンダ・2017年度1次隊)

#B401

映像

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 46人

分類 ▶ 公共・公益事業

活動例 ▶ 職業訓練学校などで生徒や教師
へ映像制作の技術移転を行う

類似職種 ▶ 番組制作、視聴覚教育 など

※人数は、2020年1月31日現在。



生徒と撮影を行う安達さん(右)。ビデオ撮影・編集・照明・音響と映像制作にかかわる技術を伝えた

PROFILE

1984年生まれ、北海道出身。地元大学のメディア学科を卒業後、テレビ制作会社に入社、ディレクター業務などを経験し、退職。その後、結婚式場にてビデオカメラマンとして撮影、編集を担当し、退職。2017年6月、青年海外協力隊員としてボリビアに赴任。19年6月、帰国。現在は、スペイン語強化と異文化への理解を深めるためメキシコにて事務職兼広報業務に従事している。

活動概要

職業訓練学校の映像コースにて教師や生徒の技術向上を目指し、以下の活動を行う。
●教師の補佐として授業で直接指導
●講演会において、最新技術の紹介
●環境整備として録音スタジオを創設
また、広報の一環として、JICAボリビア記念行事や日系社会の映像も制作した。



あだち ゆか
安達弓華さん
(ボリビア・2017年度1次隊)

Q メインの活動は？

ボリビアにおいて映像技術はテレビを見ていてもコマースシャルを見てもらってもそれほど高くないと感じました。映像の専門学校はありましたが、授業料が高くて、良い技術を学べる人は限られていました。私が配属された学校は、授業料は安いものの、教師の技術力が不足しており、生徒は十分な技術を学ぶことができていませんでした。この問題を解決するために、教師と共に授業を行い、技術が不足している部分を補佐する形で活動を行いました。最初は、教師すらも授業に遅れてくる、やる気のないなど散々でしたが、日本の映像を見せたり、新しい技術を紹介したりすることで生徒が少しずつ興味を持ち始め、授業で質問をするなど積極的な参加が増えていきました。

Q 活動の最大の困難は？

環境整備による技術向上を目指す目的で録音スタジオを創設することが一番の困難でした。スタジオを設計した経験がなかったため、知り合いのツテで情報を収集し、創設に必要な機材などのコストを計算。同僚の助けを借りながら細かい企画書を作成。学長の許可を得るまでに約8カ月。機材を集め、倉庫になっていたスタジオ予定地を掃除し、建築学科の教師の手を借りて、外枠を創設。スタジオ内を整備し、完成までに約1年かかりました。

Q どう乗り越えましたか？

1人で行うことは不可能でさまざまな人の協力が必要でした。協力者を得るために何度も足を運び、質問したり、催促したり、なぜ必要なのか熱意を伝えたりすることが大切でした。語学力不足で思いが伝わらず、相手も自分もイライラすることが多かったように感じます。それでも諦めずに何度も訴えることで、理解を得て、無事にスタジオを創設することができました。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

私は自分の技術が途上で本場に役に立つかどうか不安でした。しかし、日本では初歩的な技術が途上国では知られておらず、感心されることがたくさんあり、自分の技術に誇りを持ってました。それと同時に、学んだことも多く、生徒が制作した映像を見てももう一つ、表現の幅が広がりました。「自分の技術がたった1人でもいい、少しでもその人の人生の役に立ってくれたら」という思いで活動することで、気持ちも楽になり、楽しく活動することができました。
現役隊員さんや未来の隊員さんにお伝えしたいのですが、映像は未来に残せるもの、世界に派遣国を知ってもらう最高の媒体です。活動を写真に撮る隊員さんは多いですが、写真以外にぜひ映像も残しましょう！

Q メインの活動は？

ウガンダでは、JICAによる稲作産業発展のための支援が15年以上にわたって行われています。私が協力隊として赴任した当時、PRIDEフェーズ1(2011〜2019年)が実施されており、国内におけるコメ生産量の増大を目標に、現地の農業普及員や農民に対して稲作技術研修を実施していました。しかし、研究所内において社会科学分野に人員が不足していたこともあり、これまでに十分な社会調査が行われておらず、研修による農民への効果ははっきりと把握できていませんでした。このような経緯により、これまでに研修を受講した農民を対象に社会調査を行い、研修による効果や課題を明らかにしました。陸稲・水稲栽培地域において長期間の調査を3回実施し、合計で300人以上の農民にインタビュー調査を行いました。

Q 活動の最大の困難は？

インタビュー調査では、研修後の技術採用率やコメ収量の推移、各作業への投資金額や労働投入量など様々なことについて聞き取りをしました。調査期間中は予想外の出来事が日常的に起こりました。例えば、調査に同行予定であった通訳が調査開始前日に突然消えたことや、約束の場所や日時に農民が来なかったこと、当時貸与されていたバイクがウガンダの警察と同じ車種で

Q どう対応しましたか？

現場における状況の変化にすぐに対応することが求められました。例えば、常に代替案を持つことや達成段階を1段階または2段階下げるなどがありました。状況の変化に対応した「現段階におけるベストな選択は何か？」と常に考えることで、多少のトラブルには対応できるようになりました。また、うまくいかないことが起きても「こんなもんだらう」と気軽に構えるように意識を変えようと思いました。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

社会調査にはさまざまな方法があり、調査設計や調査実施においては実施者のセンスが問われると思います。正解もなく間違いもありません。そのため、何をしたらいいのだろうか迷うことがあると思います。
もし、私のように農村にて農民にインタビュー調査などを実施する場合は、はじめに「自己紹介」から始めてください。そして、調査の目的などを農民にしっかりと説明し、インタビュー調査への許可を得てください。この過程がとても重要です。あとは農民の話をしっかり聞くだけです。

* PRIDE: Promotion of Rice Development、コメ振興プロジェクト。

株式会社森林調査設計事務所

設立：1989年5月
 本社所在地：東京都江戸川区篠崎町
 従業員数：15人
 事業内容：・治山、林道等測量設計事業
 ・水源林整備・環境調査事業
 ・落石対策調査事業など

2018

8月、株式会社森林調査設計事務所に就職③

3月、帰国。

2016

3月、青年海外協力隊に参加②

2015

自然農法研究所の研修生。

2013

青年海外協力隊を受験①

2009

東京農業大学入学。

1991

東京都出身。

「自然には勝てない」と言われるが、「自然と適応したい」という思いがあり、山の防災や森林保全がその方法を知るひとつではないかと考え、入社。

民間企業に

活動の幅が広いコミュニティ開発で受験したものの不合格。スキルアップを決意する。

農業系の実践スキルを身につけ、野菜栽培隊員として合格。派遣前には技術補完研修も受講した。

協力隊を受験

協力隊に参加



渓流にダム建設を計画するための測量補助作業中の堀切さん。堀切さんの会社が実施する業務の一例は次の通り。豪雨などで山間部の渓流が荒廃した場合、その渓流を安定させるためのダムを設計する業務が、省庁から公示される。その業務に関する提案書を省庁に提出し、入札。落札後、現地調査や測量を行い、発注者と相談しながら計画する位置やダムの種類を決め、対象地の現況や設計図面、計画案等をまとめた報告書をつくり、それを省庁に提出して終了となる



before ▶ after 人生を変えた2年間

before
農業研修生

↓

after
森林土木分野の測量・建設コンサルタント企業の社員

高校時代に協力隊のことを教えられ、参加を目標に農業大学に進学した堀切さん。卒業後、農業研修生などを経て、野菜栽培の隊員としてフィリピンに派遣された。現地で有機農業の普及を通じ、自然の恩恵の大きさに気づけた反面、時折やってくる自然の猛威を実感。山の防災や森林保全に興味を持ち、帰国後は、森林土木分野の測量・建設コンサルタント会社に入社した。

有機農業の研修生となったりして、2年後、協力隊を受験。合格し、野菜栽培の隊員としてフィリピンへの派遣が決まった。フィリピン中部にあるバナイ島の西海岸に位置する、山と海に挟まれた町セバステ。この町役場の農業課で有機農法による野菜栽培の普及を行う事が堀切さんの要請内容だった。しかし、現地の農家の主要栽培作物は米で、野菜は乾期につくる家庭菜園程度。農家の声を聞いたところ換金作物とは考えられていないとわかり、まずは有機栽培で得られる効果を示すために野菜のデモファーム設立に着手した。畑の場所を決め、耕し、緑肥をまき、育苗ハウスやコンポストも作成。トマトやナスなどの夏野菜を育苗してから畑で育てることで、現地の農家が行っている直播きよりたくさんの野菜が収穫でき、現地での有機農法と野菜栽培の成果を示せたと思った。

堀切さんが初めて世界の広さに触れたのは中学生のとき。自然に根差した生活に憧れを持つ中で、「世界がもし1000人の村だったら」を読み、そこに暮らす人々の生活に興味を抱いたという。高校生になり進路相談で、異文化を肌で感じられる仕事はないかと先生に相談したところ、提案されたのが協力隊だった。その後は、協力隊参加を目標に、衣食住という生活の基本のうち、自身が一番身近に感じた食を支える農業を大学の進路に選択。アジア・アフリカ地域に的を絞り、熱帯地域の農業を学んだ。大学卒業後は、農業の実践経験を積むため、農家で働いたり、

ところが思ったように農家は興味を持ってくれない。小作人である彼らは収穫の1割を地主に納める必要があるため、リスクが高かったのだ。乾期と雨期のある任地で、野菜栽培ができるのは乾期のみで、チャンスはあ

自然には勝てなくても適応したい

堀切若奈さん

フィリピン・野菜栽培・2015年度4次隊



フィリピンで米ぬか肥料の作り方を農家に教える堀切さん。任地の9地区で農家に米ぬか肥料の作り方・使い方の講習会を開催した

後の林道の復旧や災害を未然に防ぐために、道路や治山ダム、山腹工などを計画・設計している。堀切さんは、これまで農業に携わってきた大地の恵のありがたさに気づいたと同時に、自然の猛威を実感したことから、山の防災や森林保全に興味を持つようになっていった。

「任地の山は、料理に使う薪として無計画に木が伐採され、多くの場所が『はげ山』になっていました。また、乾期と雨期の降雨量が極端に違い、灌漑設備の有無で米の収量が2倍近く違うことも知りました。山にある木々が、雨を貯め、川に流れる水の量を調節し、田畑にたどり着く。森林の健全さが農業に密にかかわっていることを実感しました」

同様に2018年8月に入社し、現在は契約や入札にかかわる事務作業や、設計図面、地図作成業務、調査アシスタント業務などに携わっている。業務の中で、技術者や取引先の状況をサポートすることができているのは、フィリピンで相手の状況に合わせて活動を転換できた経験があったからと感じているそうだ。また、起こってしまった災害や起こりうる災害に対して、植生マットを利用した崩壊地の復旧など、自然の力を借りながら修復する対処法を考えられるのは、仕事のやりがいのひとつだと堀切さんは話す。

協力隊参加を目標としていた堀切さんは、任期を終えると目標がなくなってしまう、焦りを覚えた。「まずはきちんとした社会人経験を身につけよう」と就職活動を開始。農業系の就職先を考えていたが、ハローワークで現在勤めている株式会社森林調査設計事務所の求人に出会った。同社は森林土木分野の測量・建設コンサルタントで、災害が起きた

「以前『自然には勝てない』と農家さんに言われたことがあります。自然に無理をさせず、人間も無理をしすぎず、できる範囲で工夫して生きていくことが、持続可能な社会につながると思っています。自然に少し手を加えつつ、うまく付き合う方法を模索し、この先も働いていきたいと思っています」

*1 治山…土砂くずれなど山地災害が起きないように山腹を整備したり、渓流の浸食拡大を防止したりすること。
 *2 山腹工…山の中腹にある荒廃地の風化、侵食、崩壊の拡大の防止を目的に、土木的工事を補助手段として植生を導入すること。

帰国後

第14回 助産師隊員篇

よもぎま話

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、OB・OGに語り合ってもらいます。



Cさん(女性)

【派遣前】
助産師(総合病院勤務)
【協力隊】
▶退職参加
▶・助産師
・中南米
・2015年度派遣
▶看護学校で看護教育に従事
【現在】
助産師(診療所勤務) / 大学の非常勤講師

Bさん(女性)

【派遣前】
助産師(総合病院勤務)
【協力隊】
▶退職参加
▶・助産師
・中南米
・2014年度派遣
▶大学の看護科で看護教育に従事
【現在】
助産師(総合病院勤務)

Aさん(女性)

【派遣前】
助産師(総合周産期母子医療センター勤務)
【協力隊】
▶退職参加
▶・助産師
・アジア
・2014年度派遣
▶総合病院で技術指導に従事
【現在】
NGO職員 / 助産師(診療所勤務)

技術を高めることができると思ったからです。しかし、協力隊に参加したという自分の個性を完全に消して働きたくはないと感じ、診療所を選んだのですが、正解だったと思います。国際緊急援助隊で派遣されるときには2週間ほど仕事を休まなければならないため、登録には職場の理解が必要です。私は採用面接の際、国際緊急援助隊などへと仕事の幅を広げていきたいと正直に伝えたところ、院長は「やりたいことをやって命を輝かせないともったいないよ」と言われて受け入れてくださいました。そういう意味でも、良い再就職先を得ることができたなと思っています。

協力隊経験の影響

B 先ほどお話ししたとおり、私も帰国の時点では国際協力の道に進むことを考えており、国際緊急援助隊などについて調べたこともありました。しかし、海外で暮らしたことにより、「高齢出産」や「早産」、「虐待」の多さなど、「母子保健」や「子育て」に関する日本国内の課題をより強く意識するようになったので、今はそちらにかかわる方法を見つけていきたいという思いが強くなっています。今の立場でそれらの解決にかかわる方法はなかなか見つからないのですが、いずれ大学院に進学するとなったら、「虐待」などを研究テーマにしようかとも考えています。それは、私自身が子どもを持ったことの影響かもしれません。

A Cさんは不妊のカウンセリングもされているとのことでしたが、「不妊治療」もやはり今の日本の課題のひとつだと感じています。共働きが当たり前となっているなか、女性が仕事をしながら治療を続けるというのは、身体的にも心理的にも厳しい。社会としてのフ

A 私は助産師として総合周産期母子医療センターで3年働いた後に協力隊に参加しました。協力隊時代は総合病院で同僚への技術指導などに携わりました。帰国後は、産婦人科の有床診療所で助産師として働くかたわら、大学院に進学して公衆衛生学を学びましたが、その時点では国際機関で働きたかったのですが、しばらくは国内でできる国際協力の仕事に就いて家族との時間を大事にしようと思い、大学院修了後、国際保健の政策提言などを行うNGOに就職して今に至ります。診療所の仕事も、週末だけが続いています。

B 派遣前は総合病院で6年ほど助産師を務めました。協力隊では、大学の看護科で実習指導などに携わりました。帰国してまもなく結婚し、その後ふたたび助産師として総合病院で働き始めました。現在は育休中です。

C 私も総合病院で3年半ほど助産師として働いてから協力隊に参加しました。配属先は看護学校で、やはり実習指導などに携わりました。帰国後は産婦人科の有床診療所で助産師として働いています。

再就職先の選択

A 帰国直後、「臨床の感覚を早く取り戻したい」という気持ちがとても強かったため、私は1カ月ほどで診療所に勤め始めました。大学院への進学も任期後半から考え始めていたので、帰国後に大学院を選び、受験しました。

B 帰国の時点では私も国際協力の道に進むことを考えていたのですが、母校の大学の先生から「うちの大学院で修士号を取り、教員として残ってくれないか」と声をかけていただいたこともあり、大学教員の道も選択肢に

オローが必要な領域だろうと思います。

B 不妊治療で検査や処置がたくさんあるのは女性のほうですからね。

C 私が不妊カウンセラーの資格を取ったのは、助産師を務めているうちに、「出産に関しては妊娠前のアプローチも重要であり、そこを含めて女性に寄り添っていきたい」という思いが強くなってきたからでした。

A 「妊娠前のアプローチが重要」という点は、まさに私が大学院で行った研究の結論でもありました。協力隊時代の派遣国をフィールドに「低出生体重児」の要因を調査したのですが、やはり妊娠前の女性へのアプローチが重要だったのです。

おふたりは私と異なり、協力隊時代の活動は看護教育でしたが、その経験は帰国後の助産師としての仕事に影響がありますか。

B 派遣前も帰国後も勤務先は規模の大きな総合病院なので、いずれでも新人教育に携わっているのですが、派遣前に比べると今は「教えること」より「聞くこと」への意識が強くなっていると感じます。間違ったり方をした新人に対し、派遣前は「正しいやり方こうだ」と説明するだけだったのですが、今はそうやって頭から否定することはせず、まずは「どうしてそうやろうと考えたのか」を聞くようになりまし。そうして、一理ある考えにもとづいてやった場合、間違った考えにもとづいてやった場合、何も考えずにやった場合とで、指導の仕方を変える。協力隊時代の教え子たちは、「清潔」などに関する常識の基準が日本の看護学生とは異なっており、思いもよらない行為をすることが多かった。どうしてそうやろうと考えたのか」を頻繁に尋ねなければなりません。そうするなかで「聞く」習慣が身に付いたのだらうと思います。

入れるようになりました。国際協力の道に進むにしても、大学教員の道に進むにしても、まずは修士号を取ることが必要だろうとは思ったのですが、知人から「いったん臨床に戻って感覚を取り戻してから、新しい道を探しても良いのではないか」というアドバイスももらったこともあり、まずは臨床に戻ることにしました。

C 私が臨床への復帰を選んだのは、女性に寄り添う臨床の仕事が好きだからです。現在は、資格をとって不妊のカウンセリングに携わったり、看護大学で助産学の非常勤講師を務めたり、国際緊急援助隊に登録したりと、臨床以外に仕事の幅を広げることもできており、そのおもしろさも感じています。

B 私は「臨床の感覚を取り戻すためには、慣れている環境が良いだろう」と考え、ハイリスクなお産も扱う大学病院や診療所ではなく、派遣前の勤務先と同じ500床程度の規模の総合病院に再就職しました。良い選択だったと感じているのですが、おふたりが派遣前と異なるタイプの医療機関を再就職先に選んだのは、どのような意図だったのでしょうか。

A 帰国直後に友人のお見舞いで以前勤めていた病院を訪れた際、「私は、もう大きな病院では働けない」と強く実感しました。以前の勤め先のような大きな病院ではリスクの高い患者さんも多く、質の高い標準化された助産ケアを常に求められます。その点、現在勤めるような診療所では比較的低リスクの低い患者さんが多く、助産師ひとりひとりのケアや判断が尊重され、自由度は高いように思います。大学院やほかの仕事との両立といった柔軟な働き方も、大きな病院ではまず難しいと思いました。

C 私は帰国後の再就職先として、NICUがあるような総合病院も検討しました。

C 私の協力隊時代の教え子は非常に積極的に、授業中によく発言していました。一方、現在大学で教えている看護学生たちは、グループワークでもなかなか議論しない。そこで私は、協力隊時代の教え子たちの様子を撮影した動画を見せたり、グループワークの際、「負けないような大きな声で議論してください」と言って派遣国のノリの良い音楽をかけたたりして、「発言する」という習慣を付けさせるよう努めています。協力隊経験がなければ、座学だけの授業をしていたのではないかと思います。

今後のビジョン

A 今後については、いずれ国際機関で働きたいという気持ちですが、先ほどお話が出た「不妊治療」や「高齢出産」などのお話の日本での課題は、いずれ途上国でも出てくるのだと思います。こうした課題の解決に関する経験値を応用できる日がくると良いなと考えています。

B 私はやはりお母さん方にかかわるのが好きであり、子どもが生まれたということもあるので、しばらくは臨床に携わりながら、お話に出た日本の課題の解決にかかわっていかねばと思っています。そうした役目を果たすためにも、常に情報のアンテナを張り、勉強を重ねていかなければと思っています。

C 私は現在、公認心理師の資格を取る準備を進めています。不妊治療を受けている女性には心理面のケアも必要であり、それにも携わりたかったからです。そのようにして、これからも女性に対してさまざまな面で寄り添えるようになっていきたいと思っています。

生活に役立つ技

おしゃれにリユース

ナビゲーター = 佐藤友紀さん
(バングラデシュ・環境教育・2012年度2次隊)

バンダナでウエストポーチをつくらう

50センチ×50センチのサイズのバンダナや布を使って簡単につくれるウエストポーチをご紹介します。これは日本の文化である風呂敷の活用法のひとつで、おしゃれに楽しくリユース(もう一度使う)を伝えることもできます。現地の布を使ってもカワイイと思うので、パティックやカンガなど派遣国ならではの生地を使ってチャレンジしてみてください!

①バンダナを広げ、ズボンのベルト通しに2つの角を内側から通す。

②通していない角と真上の角をそれぞれ2回結ぶ。(1回目はギュッと強めに結びと解けにくいです)

③完成! 見かけによらず、ペットボトルやお菓子などたくさん入ります。

知ったく情報

身近な材料で行う染色

ナビゲーター = 迫頭美紗さん
(セネガル・小学校教育・2014年度1次隊)

自然染色(草木染め)

染色は意外と簡単にでき、できあがりもきれいでおすすめです。色が出そうな素材(タマネギの皮など)があれば挑戦できます。染色には、色落ち防止などのために「媒染液」が必要で、ミョウバンが使われることが多いですが、手に入りづらいときは、鉄さびを浸けた酢なども使うことができます。自然染色は色落ちしやすいですが、あまり気にならない方は現地にある素材でぜひ試してみてください。

【材料】

- 布(化学繊維は染まりづらい)
- 色が出そうな素材(タマネギの皮、ハイビスカスのガク、コーヒカサなど)…布の重さの半分~同じくらいの量
- 媒染液の材料…金属(さびた鉄(※)や銅など)、酢、水
- ヒモ(しぼり染めをしたいとき)
- 鍋・さいばし
- 鉄釘を塩水に1日つけ、自然乾燥させるとさびる。メッキ処理された釘は表面をやすりなどでけずる。

③素材を濡して、布を入れてかき混ぜながら20分くらい煮る。しぼり染めをしたいときは、布の一部をヒモでしばる。

④染めた布を水洗いして水気を切り、100~1000倍の水で薄めた媒染液に20分程つける。

⑤(しぼった場合はヒモをといてから)水洗い→脱水→陰干し→完成! 現地で行ったときは、時間や重量も計らないで作業しましたが、きれいに染まりました。

活動に役立つアイデア

スマートフォンで動画づくり③ — 編集編 —

ナビゲーター = トランティ美佳さん
(コスタリカ・映像・2018年度1次隊)

編集の3つのポイント

写真や動画を撮影するのに便利なスマートフォン(スマホ)。そのスマホで短い動画をつくるためのプチテクを、3つのテーマに分けて3回連続でご紹介します。ちょっとしたコツを抑えて、発表のツールとして使ってみてください。

動画づくりのポイント、最後は『編集編』。編集は人それぞれ、さまざまなやり方があります。旅行の記録、ドキュメンタリー、イベント報告など、つくる動画の目的や種類によっても、やり方は変わってきます。今回は、そのなかでもいろいろな映像編集の参考になるポイントをご紹介します。撮影した映像を編集し、動画が出来上がる瞬間は、とてもうれしいものです。ぜひご自身で編集をし、その瞬間を味わってみてください。

01 「ざっくり編集⇒通して見る」を繰り返す

動画の編集に正解はありません。そのため、編集作業はいくら時間をかけても終わらない……なんてことも。そこで編集のプチテク。

①編集前に大まかな流れを決める
『企画・構成編』でつくったふせんを参考にするとつくりやすいです。

②流れをもとにざっくり編集
細かいことや尺(時間)は気にせず、とにかく映像の流れに沿って並べてみる!

③編集した動画を全部通して見る

④1度目より細かく編集⇒通して見る⇒さらに細かく編集……
この作業を繰り返し、完成に近づけていく
一度最後まで映像が出来上がらないと、いいか悪いか判断ができません。下書きの感覚で一度編集し、全体を通して見ることで新しいアイデアも生まれてきます。

02 映像の切り替えはビートに乗って気持ちよく

見ていて気持ちの良い映像をつくるポイントのひとつが、映像と音楽の調和。映像を切り替えるタイミングや被写体の動きと音楽がマッチしていると、見ている人の気持ちをより惹きつけられる動画になります。ポイントは2つ。

①映像を切り替えるタイミングは音楽のビートに合わせる
3拍子の音楽なら、1・2・3の3のタイミングで映像を切り替えると、より印象的になります。

②映像に音楽の流れやストーリーを合わせる
子どもたちが元気よく走り回る映像に、音楽の一番の盛り上がりを合わせる……など映像の内容に合わせて、音楽を付けてみてください。2つの調和が、動画をより魅力的に仕上げてくれます。

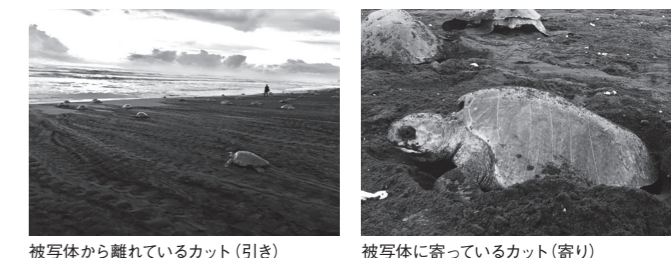
03 アップ⇒ルーズ 色んな構図でメリハリを

テンポの良い映像を編集するポイントを紹介。

①寄り(アップ)と引き(ルーズ)の構図をバランスよく織り交ぜる

②漫画を参考に編集してみる

③『次に何を見たいか』を考えながら編集する
同じ構図の映像が続くと、テンポが悪くなり、どうしても飽きてしまいます。ぜひ色んな構図を織り交ぜて編集するよう意識してみてください。そこで参考になるのが、漫画。漫画は、被写体から離れた構図(ルーズ引き)と被写体に寄っている構図(アップ・寄り)がバランス良く並んでいるので、状況を把握したり、主人公の感情を見せたり、映像編集の基本を学ぶのにとっても参考になります。またテンポの良い映像をつくるために、撮影するときも、色んな構図で撮影するように意識してみてください。



被写体から離れているカット(引き)

被写体に寄っているカット(寄り)

スマホで使える無料編集アプリ

InShot…著作権フリーの音楽も豊富で、簡単な映像編集にオススメ。
キネマスター…さまざまなエフェクトが使える、0.1秒後ごとの映像編集が可能。細部にもこだわった編集をしたいときにオススメ。

※著作権・肖像権について…文章、画像や映像、イラスト、デザイン、音楽などには著作権、また写真や映像、絵画などには肖像権が存在します。このような権利について適切な処理を行わずに使用してしまった場合、知らない間に他人の権利を侵害してしまう恐れがあり、損害賠償を請求されることもあります。JICA海外協力隊ハンドブック「広報媒体掲載画像ガイドライン」をよく読んで、自由な使用が認められていない素材を使うときは、必ず権利者に許可を取り、迷った場合は各在外事務所にご相談したりするなど、取り扱いには十分注意しましょう。

防犯対策

—こんなとき、どうする!?—

スキミング被害に関する注意喚起

個人口座の残高を 長らく確認しないでいたところ、

ATMの設置条件や環境を気にせず、必要な時に必要な場所で現金の引き出しを行い、長期間口座残高を確認しないでいた。

知らないうちに 多額の取引がなされていた。

久しぶりに現地銀行口座の使用履歴を確認したところ、身に覚えのない使用履歴があり、隊員自身の銀行口座からお金が引き落とされていた。

解説

ATMを利用する際は、カードの投入口への細工やまわりのカメラ、鏡などに注意しましょう。ATMは銀行店内に設置されているものがより安心です。不特定多数の人が出入りするショッピングモールや空港、道路脇などに設置されているATMのほか24時間使用可能なATMなどでは、キャッシュカードの利用は避けることが賢明です。また、スキミング被害を避けるためにも信頼のできる店以外でのクレジットカードの利用には注意が必要です。



安全管理担当者からのワンポイント対策

頻繁に使用履歴を確認することで、不正利用された場合、早期にカードの利用を停止することができます。一定の期間内であれば、銀行やカード会社からの補償も期待できます。

進路開拓インフォメーション

進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役の紹介

帰国隊員を進路決定までサポートする「進路相談カウンセラー／青年海外協力隊相談役」。就職・進学を始め各種情報の提供や帰国後のキャリアに対するカウンセリングなどを行います。2020年4月現在、全国に18人を配置。各カウンセラー、相談役の連絡先などは下記ウェブサイトをご覧ください。

▶JICA海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

担当都道府県	氏名	担当都道府県	氏名
北海道	湊 和生	滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫（主に大阪・奈良・和歌山）	津田昌二
青森・岩手・秋田	松館敦子	滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山・兵庫（主に兵庫・京都・滋賀）	前原美和
宮城・山形・福島	佐藤美喜子	広島・鳥取・岡山・島根・山口	増田勇希
東京・埼玉・千葉・群馬・茨城・栃木・長野・新潟	伊藤亜紀	徳島・香川	藤岡龍生
	金山光一	愛媛・高知	宇都宮 民
	石澤志津	福岡・佐賀・長崎	高橋義弘
神奈川・山梨	岡部恵子	熊本	村上建夫
石川・富山・福井	五十嵐枝折	大分・宮崎・鹿児島	有里泰徳
愛知・岐阜・三重・静岡	小澤祐司	沖縄	新垣光博

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー／相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。

2017年度4次隊の帰国者数

2017年度4次隊の帰国者数は次の通りです。

2017年度4次隊帰国者数（2020年3月帰国／予定）	
青年海外協力隊	74人（21カ国）
シニア海外ボランティア	28人（14カ国）

※派遣名称は派遣当時のものです。

技術顧問の退任

2019年9月末と2020年3月末に3人のJICA青年海外協力隊事務局技術顧問が退任しました。

氏名	担当分野	同分野の現在の担当者
橋本正則	理数科教育	技術専門委員
高橋久光	農業開発	未定
滝坂信一	障害者支援	未定

帰国後の進路支援 帰国後研修、帰国報告・交流会の開催



交流会の様子

2月15～18日に東京・新宿区のJICA市ヶ谷ビルで、「帰国後研修」を開催し、107人の帰国したJICA海外協力隊が参加しました。この研修は、隊員経験を帰国後どのように生かすかをじっくり考える内容になっています。

帰国後研修の後の行われる帰国報告・交流会には、隊員の活用に関心を持つ自治体や企業などの関係者が参加し、自治体向けの会に20団体、企業向けの会に55団体が参加しました。本研修・交流会について、各隊員には帰国直前に在外事務所を通じて案内していますが、進路開拓中の帰国隊員も参加可能です。詳細については、下記メールアドレスにお問い合わせください。



帰国した隊員による帰国報告

▶JICA青年海外協力隊事務局 人材育成課
jvtpc-sinrosien5@jica.go.jp

今回の帰国後研修、帰国報告会・交流会の予定

帰国後研修	日程	場所
職場復帰コース	5月23、24日	JICA市ヶ谷ビル
進路開拓コース	5月23～26日	JICA市ヶ谷ビル
帰国報告会・交流会	日程	場所
自治体・団体向け	5月26日	JICA市ヶ谷ビル
企業向け	5月27日	JICA市ヶ谷ビル

古関裕而氏直筆の『若い力の歌』の楽譜を出身地である福島市に寄贈

1月9日、JICAは、青年海外協力隊の隊歌『若い力の歌』を作曲した古関裕而氏の直筆楽譜を、同氏の出身地である福島県福島市に寄贈しました。楽譜は長野県の駒ヶ根青年海外協力隊訓練所に保管されており、二本松訓練所の富安誠司所長が木幡浩福島市長に楽譜を手渡しました。

同曲は1968年に行われた初代隊員の帰国報告会において古関氏の指揮で発表され、現在まで隊員に歌い継がれています。古関氏をモデルにしたNHK連続テレビ小説『エール』が3月から放送されることを受け、JICAが寄贈を決定。楽譜は福島市にある古関裕而記念館で展示と保管される予定で、楽譜の写しを二本松訓練所内で展示しています。

2019年秋募集の選考が終了

2019年秋募集の二次選考が終了しました。それぞれの分野別の合格者数は以下の通りです。

【一般案件】（2月20日現在）

- 青年海外協力隊
- 海外協力隊
- 日系社会青年海外協力隊
- 日系社会海外協力隊

分野名	要請数(件)	応募者数(人)	合格者数(人)
計画・行政	139	204	81
公共・公益事業	30	27	8
農林水産	78	53	28
鉱工業	48	26	13
エネルギー	2	0	0
商業・観光	55	78	31
人的資源	793	646	277
保健・医療	238	161	77
社会福祉	79	55	27
合計	1462	1250	542

※一般公開ではない大学連携、自治体連携案件を含みます。

【シニア案件】（2月14日現在）

- シニア海外協力隊
- 日系社会シニア海外協力隊

分野名	要請数(件)	応募者数	合格者数(人)
計画・行政	1	10	1
公共・公益事業	9	23	2
農林水産	14	13	4
鉱工業	6	8	1
エネルギー	4	8	1
商業・観光	14	80	10
人的資源	30	71	9
保健・医療	8	7	2
社会福祉	5	7	2
合計	92	227	32

※2件までの案件応募のため、応募者数の合計は件数を表しています。

つぶやき

お題 ▶ ご褒美



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

島からの贈り物たち

医療船で3週間のアウトリーチ(*)に出た。たくさんの貴重な経験をさせていただいたが、旅の終盤では、たまった疲労から、“つらい”と感じていた。そんな中、最後に訪れた島の村長から、特産品である首飾りを頂いた。とても嬉しかった。同時に、私の耳元で「首飾りと一緒に、私の娘ももらってくれないか?」とささやかれた。

*地域へ出張して行う普及・啓発活動

ペンネーム：日本で待っていている彼女がいます。さん（大洋州・感染症・エイズ対策・2018年度派遣）

★週末の甘い夜?

常夏の派遣国。新鮮な果物が1年中楽しめる。普段つくってお手製バナナスムージーも、週末の夜は、蜂蜜やミルクを加えて豪華に。自分を甘やかして、チョコレートアイスを入れる日も。これを飲みながらお気に入りの映画を観る時間は、私にとって最高のご褒美である。

ペンネーム：きーあいさん（アジア・青少年活動・2018年度派遣）

★★喜捨

仏教国である派遣国の人たちは殺生を嫌う。それは輪廻転生思想が背景にあり、亡くなった家族や知人が転生して身の回りの生き物になっているかもしれないからだ。（ご先祖様かもしれない）野犬にもとても寛大で、ご飯の食べ残しやクッキーなどどんどん与えている。おかげで野良とは思えないくらい丸々太っている子も。

ペンネーム：マリーパバさん（シニア海外ボランティア/アジア・2018年度派遣）

*派遣名称は派遣当時のものです。

★★★疲れたときの日本茶は絶品

日本茶が好きだ。任地にも砂糖たっぷりのチャイ(茶)はある。それでは満足できないときがある。そんなとき、日本から持ってきた数少ない日本茶を飲むようにしている。どんなに疲れている日でも日本茶を飲めばまた明日から頑張ろうと元気が出てくる。魔法の飲み物。日本では当たり前飲んでいた日本茶に毎日感謝している。

ペンネーム：アボカドライブさん（アフリカ・野菜栽培・2018年度派遣）

募集中のお題

「洗濯」「掃除」「朝ごはん」「寝具」

投稿は『クロスロード』編集室まで
(P35をご覧ください)

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの活動・仕事を紹介します。

社会を動かす力を持つビーチバレーボール選手に

小島さんがビーチバレーに出会ったのは協力隊参加を経て、在パラグアイ日本国大使館での勤務中。帰国後にビーチバレーの選手として本格的に始動した。競技を開始して5年、現在はビーチバレーのトップリーグで戦っており、日本代表選手となるために数々の試合に参戦している。

プロビーチバレーボール選手
こじまとしはる
小島利治さん
(コロンビア・バレーボール・
2006年度2次隊)

海 辺だけが競技場ではない。砂浜ができれば駅でも美術館でも競技ができる「ビーチバレーボール」。16×8メートルのコートで、2人1組のチーム同士で対戦し、風や太陽など環境に勝敗を左右されるため、「知恵と経験が勝利の大きな要素。世界的にも30代以降の選手が活躍する競技です」とプロビーチバレーボール選手の小島利治さんは話す。

小島さんがビーチバレーを本格的に開始したのは、2016年、32歳のとき。在パラグアイ日本国大使館での勤務中に、同国のビーチバレー代表選手と出会ったのがきっかけだ。帰国後、オリンピック出場を目指し、国内の公式試合に参戦を始めた。3年後の2019年、国内ビーチバレーのトップカテゴリーの試合に出場し、ワールドツアーにも参戦できるようになり、国内順位は19位まで上がった。

小島さんの強さのひとつに、ほかのアスリートとバックグラウンドが異なることが挙げられる。協力隊の活動では失敗もあり、大使館での業務も最初は困難の連続だった。しかし、発想を転換しながら活動や業務に取り組み、今を大事にするラテンの考え方やプラス思考を自身の中に蓄積したことが、現在、試合での度胸や突破力につながっているという。

一方で「オリンピック出場だけが人生の目的ではない」と小島さん。過去に海外の貧しい地域でスポーツ教室を実施したとき、少女か



左：ワールドツアーファイナル大会inローマの試合（奥が小島さん）
右上：小島さんは地元・愛知県東海市にある「おおすが整形外科」の公式サポートを受け、選手として活動している
右下：パラグアイでSDGs活動を行う小島さん。ワールドツアーで訪れた国ではスポーツの楽しさを伝える活動として子どもたちに向けたバレーボール教室を可能な限り開催している

ら「この時間が人生で一番楽しかった」と伝えられ、スポーツが持つ特別な影響力と、自分が社会を動かす力になれることを実感した。コート内外で世界を豊かにできる存在でありたいと、現在もワールドツアーで海外を訪問したときは、青少年を対象にバレーボール教室などを開催している。また、プロ選手として地元・愛知県東海市の医院からサポートを受けており、地元を背負って試合に臨むことができるのも戦うモチベーションのひとつとなっている。「今も夢の途中にいますが、トップカテゴリー

の試合に出るとい、かつて自分が憧れていた存在になっていることは、『諦めなければ夢は叶う』を体現できたと思っています」

ビーチバレー日本代表選手を決定する試合は5月中旬に開催予定。その試合に出場する選手は4月下旬に発表される予定だ。

●プロフィール：1983年生まれ、愛知県出身。中京大学大学院在籍中の2007年1月、青年海外協力隊員としてコロンビアに赴任。09年1月に帰国後、復学。修了し、在パラグアイ日本国大使館勤務を経て、16年4月よりビーチバレーボール選手に。日本ランキング19位（20年2月13日現在）。

クロスロード

令和2年4月号【第56巻第3号 通巻655号】
発行日 令和2年4月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』ウェブ版は
以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



ご意見・ご感想をお聞かせください。 アイデアも大募集!

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での“失敗”談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしています。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 派遣国でつくった日本食レシピをお寄せください。

隊員めし

おかわり!

自分で作るおいしい「めし」は活力の源

ブラジルのバイア州サルバドールで日本料理を通して日本文化継承のお手伝いをしています。また、バイア州を含むブラジル東北部の日系人団体を巡回して料理講習会を開催しています。地方では日本食材が手に入りにくいなか、日系のご婦人方が知恵を出し合い、工夫を重ねて納豆やあんこ、うどんをつくるなど日本のスローフードを実践しておられます。皆さまから感動と優しさをいただき、居心地良いブラジル生活と活動を楽しんでいます。

『ピーナツ豆腐』は婦人会でつくり、好評だったレシピです。「これは昔、ばあちゃんがよくつくってくれました。久しぶりにばあちゃんを思い出しました」と日系三世の方から感想をいただき、とても嬉しく思いました。ブラジルはタピオカ粉が豊富にあります。タピオカ粉を入れることによって、もちもち感が増します。火にかけてとき、沸騰すると飛び散るので、火傷に注意してつくってください。



今月の料理人

まつもと
松本 やよいさん (日系社会シニア海外協力量/ブラジル・料理・2018年度1次隊)
●活動内容: 日系社会において、日本料理の伝承を目指し、料理講習会などを実施する。



隊員's ポイント!
タピオカ粉を入れるともちもち感UP♪

にがり不要! ピーナツからつくるお豆腐

材料(約800g)

- 生ピーナツ…1カップ
- 水…3カップ
- コーンスターチ…40g (3/4カップ)
- タピオカ粉…20g (なければコーンスターチで可)
- 砂糖…小さじ1
- 酒…小さじ1 (なくても可)
- 塩…小さじ1/2

つくり方

- ①生ピーナツを10分以上水に浸ける。
- ②薄皮をむく。
- ③3倍の水を加え、ピーナツのつぶつぶ感がなくなるまで(のり状になるまで)ミキサーにかける。ミキサーがない場合は、すり鉢状の入れ物で細かく砕く。
- ④木綿の布などでこす。
- ⑤固く絞って、絞り汁とピーナツおからに分ける。
- ⑥絞り汁に残りの材料を入れる。
- ⑦よく混ぜて、コーンスターチが溶けてから

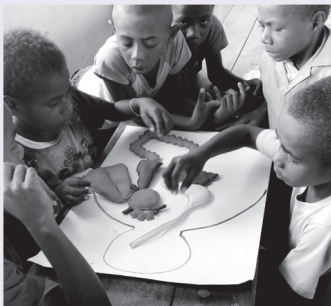
中火にかける。

- ⑧固まりはじめてたら弱火に。鍋底に線が引けるようになるまでひたすらまぜる(20~30分)。重くなってから、少なくとも10分以上混ぜ続けると、滑らかで固い豆腐に。
- ⑨保存容器に流し入れる。
- ⑩粗熱が取れたら冷蔵庫で1時間くらい冷やし固める。
- ⑪切り分けて、ワサビ醤油などでいただきます。黒蜜などをかけ、甘味として食べてもおいしいです。日本では精進料理として提供されます。



⑤絞り汁とピーナツおから。おからも食べられる

⑨小分けにしてプリン状に流し入れてもOK



今月号の表紙 バナアツ



こさか
文=小阪みづほさん
(看護師・2017年度1次隊)

バナアツでは生活習慣病が増加していますが、病院や医療従事者は少なく、可能な治療方法も限られています。そうしたなか、私は村落部で生活習慣病の予防に向けた活動に取り組みました。表紙の写真は、予防の第一歩として子どもたちに自分の体について興味を持ってほしいという思いから、自作の人体模型を使って健康教育をした際のもので、各臓器の働きや「腸の長さ」などのクイズも行ったところ、子どもたちが積極的に参加してくれたのが印象的でした。